

# 琉球大学学術リポジトリ

## 第17回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002020193">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002020193</a>

第17回

# びぶりお文学賞 受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号 2023

詩部門

## うたたね

二藤

琉球大学

第17回

# びぶりお文学賞 受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号 2023

詩部門

## うたたね

二藤

琉球大学

第十七回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第十七回琉球大学びおりお文学賞受賞作品集 目次

小説部門受賞作 該当作なし

小説部門佳作

これは小説である

香食

詩部門受賞作

うたたね

詩部門佳作

遺伝する生と

野口 佳

(琉球大学 理学部数理科学科三年)

土木 団

(琉球大学大学院理工学研究科博士前期課程二年)

二藤

(沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科四年)

藍原 知音

(琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科二年)

80

76

44

6

## 肚の蟲

富井嫉妬

(沖繩国際大学 総合文化学部人間福祉学科三年)

### 選評小説部門

### 選評詩部門

### 選考経過

琉球大学びおりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回(平成二十五年度)から、応募資格が沖縄県内の大学生(高等専門学校の場合は本科四年次以上)及び大学院生に拡大されました。

装  
丁  
  
阪  
田  
  
清  
子

# 小說部門

小説部門佳作

# これは小説である

野口 佳

十九歳最後の今日は、燃えるごみの日だった。朝七時三十分。左手でごみ袋を持ち、玄関横に置かれた眼鏡をかけ、扉を押し開ける。夏の日射しが目を焼き、今日も暑い一日になりそうだと感じた。ごみ袋の周りをコバエが四、五匹ほど飛び回っている。袋が体に触れないよう離して持ち、ごみ捨て場へまっすぐに向かう。ぼくは寝ぼけながら「捨てる神あれば拾う神あり」という言葉の意味を考えながら歩いていた。結局思い出せないままごみ捨て場に着き、袋を投げて、ごちんまりとした家に戻った。それからシャワーを浴び、歯磨きをして、二枚トーストを焼く。潮の満ち引きのように繰り返される呼吸だけをして、日々をゾンビのごとく死んだように生きていた。あるいは掻く恥すらない退屈な日々を送っていた。

ぼくは庭のある広くない二階建ての家で、父と二人で暮らしている。今年で五十二歳になる父の顔には深いしわが刻まれて、黒縁の老眼鏡と長い鼻が目立ち、見事な白髪で年齢よりずっ

と老けて見える。そして驚くほど無口だった。その様子から父は山奥の静まった古池を思わせた。穏やかな木陰に囲まれる名もない古池である。ぼくは（記憶にある限りでは）父の声を一度も聞いたことがない。たとえ天気の話ひとつすらしたことがなかった。ただこれは当然だが、相手と何も会話をしなければ喧嘩は起きない。父とぼくの仲は円満とは言わないまでも、お互いが一度も衝突することなく生活していた。だから二人がきっぱりと別れて生活するこの家は、まるでコンビニでアメリカンドックを買った時についてくる、ケチャップとマスタードが入った容器のようだった（ちなみにパキッテというらしい）。

コーヒーはぼくと父の唯一の接点だった。キッチンにはたくさんのコーヒー器具とお酒、そして百個以上のカップが整然と並んでいる。父は深煎りのホットコーヒーを飲むときには陶器のカップを使い、スコッチウイスキーを飲むときにはガラス製のグラスを使っていた。ぼくは父のように強いこだわりがあるわけではなく、毎朝同じカップで父が淹れたコーヒーを飲んでいる。もしかしたら毎日同じカップを使うことも、こだわりのないかもしれない。

毎朝ぼくが二枚トーストを焼いてダイニングチェアに腰かけると、二階から父が降りてきてコーヒーを淹れる。いつもその動きを見るときにもなく見ていた。お湯を沸かし、コーヒー豆を挽き、ドリッパーに粉を入れ、カンカンとたたいて粉を均す。間の空いた二拍のリズム。それから――

どうしてかそこで記憶がぶつりと途絶えている。粉にお湯を注ぎ始めたかと思うと、なぜか

気づけば既に二杯のコーヒーが完成していた。それは魔術のようである。本来ならお湯の注ぎ方に工夫があるのだろうが、どうしてか全く思い出せない。コーヒーケトルを持ってグルグルとまわる右手に、赤とんぼのように眩暈をってしまったのだろうか？ あるいはケトルの長細い注ぎ口が指揮棒に見えて、その旋律に聴き入ってしまったのだろうか？ 答えは分からない。自分の鼻が視界に入っていることを忘れるように、その日常の動きが全く記憶に残らなかった。

父のカップは湯気が立ち昇り、ぼくのカップは汗をかいている。ぼくは氷がからりと音を立てるアイスコーヒーの味を確かめるように一口飲んだ。苦くて美味しくない、いつもの味だ。匂いは好きなのだが、まだどうしても馴染めない。それでもぼくが毎朝コーヒーを飲むのは、父と過ごすこのひと時を大事にしているからなのだと思う。父はうずまき模様の描かれた茶色のカップを両手で包み込むように持っている。長い鼻を近づけてその匂いを堪能していた。ぼくは経験的に、今から父がコーヒーに口をつけるまで二十分ほどかかることを知っている。もしかすると父は猫舌なのかもしれない。それならアイスコーヒーにすればいいと思うのだが、香りが弱くなるのが嫌なのだろう。やはりホットコーヒーの方が湯気で華やかな香りが立ちやすい。ぼくはどうしても父がコーヒーを飲む瞬間を見たかったから、二十分座って待つことにした。

父——野口粹 (Sui Noguchi) ——は、日本だけでなく世界を席巻する芸術家である。都立藝術大学大学院の美術研究科博士課程を修了後、ニューヨークで開催された個展がきっかけと

なり世界的に大きな称賛を得た。父は美術批評家から「最も有名な『無名』の芸術家」または「空白の芸術家」と呼ばれる。父はどの作品にも決して題名を付けないから、そう呼ばれるようになった。十八世紀以前の西洋絵画では題名を付けないことが一般的であったようだが、おそらく父は意図的に言語を排除している。非言語で美を表現しているのだ。家でも無口な様子を知っているばかりには、父は言語そのものを嫌っているようにすら思えた。

父の作品は批評家に「記号化された美」と評されていたのを美術雑誌で読んだことがある。ぼくはあまり詳しく知らないが、父は絵画や彫刻、陶芸など様々な分野に取り組んでいたようだ。それら作品の素材や構成は最小限に制限され、記号的に機能している。その制限によって「作るもの」と「作らないもの」が明確になり、「作らないもの」の空白の力が生まれ、自由に動き出す。その空白は生き物のように訴えかけて、鑑賞者は作品に話しかけられたように錯覚する。作品と対話し、思考を巡らせ、外界に触れることで、不透明だった自己と対面することになる。確かそんなことが書かれていた。他にも雑誌で様々な記事を読んだが、内容はあまり覚えていない。残念ながらぼくの胃袋は、大量の情報を消化できるほど大きくなかった。

ぼくの心に強く印象に残っている作品がある。その代表作『』は人の繋がりを表現した、優しい音楽が響くような作品だった。透明なガラスで作られた直径一メートルほどの半球の中に、多彩な糸が張り巡らされている。たわみゆるんだ糸やびんと張られた糸。たとえ何千となく人が縋り付いても切れそうにもない糸もあれば、最後の一瞬光を増して消えた灯のように力尽きた糸もある。開かれた傘のような球形の空間に様々な糸が絡み合って、人の繋がり

や交わりを彷彿とさせる。その作品が話題になると、題名がないと不便であるから自然と通称が付けられた。多くの日本人はこの無名の作品を、中原中也の『サーカス』の擬態語を借りて『YUyAYuYON』と呼んだ（海外では違う呼ばれ方もするようだが詳しくは知らない）。ガラスの半球がサーカス小屋に、たわんだ糸がブランコに見えることから、そう呼ばれるようになったのと思う。どこか物憂さがありながら、郷愁に包み込まれるような感覚に人々はまどろむ。五年前の冬、ぼくは初めてこの作品を国立美術館の展覧会で見た。そして、ぼくにも性欲があることを自覚した。

あの日こんなことを考えた――

その作品を見た時、母の愛で優しく包まれて心が解放されていく感覚がした。自分と世界の境界が少しずつぼやけてにじみ、輪郭を失って溶けていく感覚。個性の液化と表現すれば良いのだろうか。すべてが消失しひとつになれた気がした。しかしその幸福の中に、恐ろしい悪魔が姿を現した。天使の微笑みは悪魔の微笑みに変わり誘惑してくる。ぼくは激しく興奮した。閉ざされた記号的な作品がその枠を破って、圧縮ファイルを解凍したように自分の中に展開されていく。作品は骨となり、やがて肉体となつて強い情欲を駆り立てる。弧をえがいた糸または半球のガラスがそうさせたのだろうか？ 光の中でプロントにきらめいた糸はつややかな髪の毛となり、ふくらんだ球体のガラスは乳房となる。乳房は豊かで若々しくまるまるとしている。その肉体には青白い血管が浮かびあがり恍惚感を得る。甘美な香りがぼくの鼻をくすぐる。

息づかいが少しずつ荒くなり、顔が火照るのを感じた。そして内から溢れる男としての性欲を自覚したのだ。

父はまだコーヒーの匂いを嗅いでいる。ぼくはいつも父がコーヒーを飲むまでの待ち時間に、ぼんやり何かを想像して楽しんでいた。父は話しかけてこないから、集中して何かを考えるには最適だった。コーヒーの匂いが広がる空間で、ゆったりくつろぐ時ほど贅沢な時間はないだろう。

もしも、ぼくが男ではなく女だったら、どんな風に生きるのだろうかと思像してみた――

わたしは冬をまだ十回しか知らない。だんだん胸がふくらんできた。ちよつとうれしく、ちよつとはずかしく、そしてたまらなく苦しい。からだがそこをおき去りにして、お別れするみたい。このからだ嫌で、ここらだけになりたかった。でもからだがなくになると、いつの日か彼とくちづけができないの。わたしの白馬の王子さま。星うらないでは、おとめ座の男の子と相性バツグンだって！ だからそのいつか出会う彼のために、わたしはこのからだをとっておく。

それからわたしはもう三十回の冬を知っていた。結婚して一年目の更けた夜、わたしたちはベッドの上で抱き合った。キスもした。服を脱いで夫に乳房を見せつけた。まだ若く魅力的だと主張するように。そうして子どもが産まれた。今、その子どもはわたしの乳を飲んでる。時々わたしは自分の体が二つに分かれたように思う。胸と上半身は子どものためのもので、陰

部と下半身は夫のためのもの。二つの唇を持つわたしは一人ずつに分離できず、お互いが抱き合ってわたしになっている。この胸が垂れてしぼむまでどうか一緒にいさせて。そんなことを子どもに乳首を刺激されながら考えていた。その性的興奮は近親相姦になるのだろうか。その白い乳液のほとばしりは男の射精と似ているのだろうか——

ああ、やはりぼくは世界を男としてしか認識できなかった。女心というものは全く分からない。どうして女性は白馬を夢みるのだろうか、栗毛の馬もいるというのに。

もしも、たとえばぼくが同性愛者だったら、どんな風に生きるのだろうかと想像してみた——  
僕はいつから同性愛者だったのか、はっきり分からない。ただ発見したのは大人になってからだ。学生の頃、僕は運動も勉強も何でもこなせたから女子に人気があった。女子と遊びに出かけることも時々あり、それは楽しかったけれど、性的な衝動は一切湧かなかった。だから僕は自分が奥手なのだろうと考えた。いつか良い相手と巡りあった時、本能的に性的興奮を抱くのだろうと。しかし大人になってからも、性的衝動に駆られることは一度もなかった。付き合えば変化するかもしれないと思い、告白されて女性と交際したけれど結局相手に性的魅力を感じなかった。むしろ不思議なことに男性の肉体の方に興味を抱いた。ぼくはその違和感に「自分は同性愛者である」と名前を付けると、すっと腑に落ちたのだ。そして自分が同性愛者だということを大人になってから発見した。乙女座の僕は、心が女性として生まれてきたのだろうか？

今、妻は子どもに乳をあげている。僕は結局、世間体を気にして女性と結婚することを選んだ。妻には僕が同性愛者ということを隠している。妻には悪いと思っているが、それでも隣に居ると自分が一般的な人生を歩めているようで、苦痛が多少和らぐのだ。はたから見れば僕は普通の夫婦にしか見えないはずだ。しかし時々思う。本当にこれで良かったのかと――

ばくはこの自分で想像した男を哀れに思った。この男にとっては相手に愛されることより、相手を愛することの方が難しいのだ。だってこの男は、自分すら素直に愛せないのだから。

もしも、たとえば人が無性生殖をする動物で、ひとつの個体だったらどんなことを思うのだろう。つまり、ひとりひとりが人体の細胞として機能する、巨大な「人間」という一体の有機体だったらどんなことを思うのだろう。そんなことを考えようとしたがすぐにやめた。もしそうだったのならば、あの日父の作品を自分の目で見る事ができなかつたと気づいたからだ。人は違っているから互いに共鳴し合う、それは音楽のように。

もうアイスコーヒーの水はすっかり溶けてなくなっている。長く椅子に座っていたから尾骨が痛くなってきた。天井をぼんやり眺めながら、ずっと考え込んでいたようだ。足も少しだけ痺れている。ぼうつと十代最後の日にしたい事も考えたけれど全く浮かばなかった。明日しいことも浮かばない。将来の夢も何もない。自分ひとりの力でこの退屈な世界を変えることはできないから、世界の方から変わることをひそかに願っていた。

父は相変わらずカップを十本の指で包み込んでコーヒーの匂いを嗅いでいる。芸術家のための細長く繊細な十本の指だ。この指から様々な美しい作品が生まれると思うと、その指を見ているだけで時間は過ぎていった。もう二人とも無言のまま二十分近く経とうとしている。ぼくはこの沈黙の重みが何よりも好きだった。それは冬の朝に布団にもぐり込んだような、包み込まれて安心感のある重みだからだ。父とコーヒーと一緒に飲む時間は、（お互い何も話さないけれど）ぼくにとって居心地がいい時間だった。

時計を見ると父がカップを手にしてから二十分経っていた。まもなくだ。父を見てみると右手の人差し指がぴくりと動いた。するとその瞬間である。勢いよく、あれだけ大切にしていたコーヒーを体内に放り投げるようにして、一口で飲み干した。ぼくは息を呑む。古池に蛙が飛び込んだのだ。ごくっという音が静寂を破り、死の古池に一瞬の生の営みが発生して、父に生命が吹き込まれる。しばらくすると音は消え、また静寂が広がる。こんな躍動感のある父を見られるのは、朝のこの一瞬だけだった。いつもこの時間だけは、退屈な人生をわずかに忘れられた気がした。

ぼくはそれを見て満足して、ぬるくなったコーヒーを飲み干した。水が溶けて味が薄くなっている。ぼくは服に落ちたトーストのくずを払い、立ち上がろうとひじ掛けに手をついた。するとその時、どこからか微かに地鳴りが聞こえた。奥が見えないほど暗い洞窟に反響するような鈍い音。それが声だと気づくの二秒ほどかかった。

「夜、酒飲むか」と父は言った。石から一滴の水を絞り出そうとするような低く枯れた声。ぼ

くは驚いた。父の声を初めて聞いたからだ。ただ黙って頷いて逃げるようにリビングを出た。

部屋は雑然としている。ぼくは見慣れたその自室がどこかよそよそしい異世界に変貌して見えた。焦燥だとか、混乱だとか、動揺だとか、とにかく居心地が悪い。漫画を読んでみてもそこに書かれている文字の間隔がうまく掴めず、音楽を聴いてみても最初の十秒すら辛抱できずにそわそわする。何しろぼくは父と一度も話したことがないのだ。全くどうしていいのかわからない。夜が待ち遠しい気持ちと、夜が来てほしくないという思いが混ざり合って、居たたまれなくなった。

ぼくは気を紛らわせようとして、とりあえず部屋を掃除することにした。床には本や文房具、いつ飲んだのか分からない空いたペットボトルが、居場所を失って転がっている。歩くための足の踏み場は所々確保され、そこだけ床面が姿を現していた。ぼくはその虫食いの床面を頼りにして周辺を片付け始めた。あらゆる物が適切な住処へと帰っていく。本は本棚へ、万年筆はペンケースへ、ペットボトルはゴミ箱へと。部屋と同時に心も整理されていくようで心地よかった。だんだん心の平穏を取り戻していく。しかし掃除をしながら、ふと考えてしまった。ぼくの住処はどこなのだろうか？ 適した居場所はどこなのだろうか？ 綺麗に片付いていく部屋とは対照的に、植物が根を張るように思考が広がっていく。しかも厄介なことに植物が一度根をおろすと、もう始末に負えなくなるのだ。心に一度つるが絡みつけば次第に増殖し、やがて侵食される。

部屋は片付いて、床面は殻を剥いたゆで卵のようにつるりと輝いていた。いや、それだけではない。思考もゆで卵のように固まり始めていた。はじめは透明な白身に包まれ見えていた黄身が、茹でられるとたちまち覆われて見えなくなる。それが硬い殻に隠されて黄身の存在は不確かなものになっていた。ぼくは最後にペンケースを収納しようと机の引き出しを開けると、奥に一本の赤い絵筆を見つけた。柔らかく弾力があり、水含みも良さそうな毛質。これは五歳の誕生日に父からもらったものだった。あれ以来プレゼントをもらっていないから特別よく覚えてる。

昔こんなことがあった――

ぼくは幼い頃ずっと父に憧れていた。父の描く今にも動き出しそうな絵画や、オルゴールのように精巧な立体作品が大好きだった。(今でもそうだが)家の二階には父の寝室があり、二階全体を父はアトリエのひとつとして使っていた。ぼくはいつもそこで父が制作する様子を見ていた。父はぼくが芸術に興味があると思っただろうか、五歳の誕生日に一本の赤い絵筆と画材一式をくれた。その中でも特にホルペインの四十八色絵具が気に入った。パレットに何色か絵具を絞り出してみると、赤は林檎のように艶やかで、黄は卵の黄身のように瑞々しく、青は空のように澄んでいる。ああ、これを全部混ぜたらどんなに美しい色になるのだろう? ぼくは好奇心を抑えられず興奮した。混ぜてみると、それは黒になった。なるほど、これが一番美しい色なんだな。そして好きな色ができると同時に嫌いな色もできた。それは白だった。美しい

い黒を汚す醜い白。黒に白が少しでも混ざると、黒はもう元の美しさを失う。ぼくはこの色が憎くて仕方なかった。それ以来ぼくは黒色の文房具だけを使い、黒い服ばかり着るようになった。

だんだん画材を使い慣れてきた頃、ぼくは父と一緒に絵を描くことになった。どうしてそうなったのか経緯は覚えていないが、おそらく父にぼくが画材を使っている姿を見せて喜ばせたいという気持ちがあったのだと思う。ぼくが初めにキャンバスに絵を描いて、その後父が手を加えて一枚の絵を完成させるという、二人で初めての共同作業だった。まずぼくがキャンバスに一匹の鳥を黒色で描いた。最も美しい色である黒の鳥が、颯爽と風を切り飛んでいる絵だ。ぼくは自慢げに父にキャンバスを渡し、父は筆を手に取り背景を描き始めた。父は作業をするとき青ざめた苦しそうな顔をする。ぼくも息が詰まる。しばらくしてキャンバスには水平線と海と空と、そして朝日が描かれた。その瞬間、黒の鳥が背後に朝日の白い光を受けてシルエツトに変わる。ぼくの美しい黒の鳥はただの影になってしまった。心の拠り所だった黒が白に犯される。その時ぼくは白の美しさを知ってしまったのだ。穢された黒の鳥は、一瞬にして墜落してしまった――

それ以来ぼくは絵を描けなくなり、二階のアトリエにも行かなくなった。天才というものは残酷だ。本人の知らないうちに周りの者を殺して、その才能に自分すら苦しめられるのだから。

父が部屋をノックする音で目を覚ました。枕元の時計を見ると、日付は変わり時刻は零時を

過ぎてゐる。ぼくは寝ている間に二十歳になっていた。どうやら一日中部屋を片付けた後、疲れて眠ってしまったていたらしい。父に呼ばれてダイニングに向かうと、机にはお酒が何種類か用意されていた。ぼくは「ボウモア 21」と書かれたウイスキーの隣に、気になる黒い壺を見つけた。その壺の木札にはぼくの名前——野口圭——と書かれている。壺を手に取り裏面を見てみると、そこには「誕生記念」と記されていた。

「これはお前が産まれた時に用意して二十年貯蔵したものだ。熟成して良い古酒になっているだろう」と父が言った。二回目聞いた父の声は堂々としていた。低く力強い声だ。

父は壺の封を開けて、キッチンから薄いガラスで作られたグラスを二つ持ってきた。

「グラスによって味が変わるの?」とぼくは、毎朝父が違うカップを使っていたことを思い出して聞いた。

「飲み口が薄かったり形状が違ったりすると香りの広がり方も変わる。それによって味が変わって感じることもある。だけど幸福の美酒というものは、たとえ紙コップで飲んだとしても至高の味だ」と父は答えた。

父はグラスに氷を入れて、ひしゃくでお酒を注いだ。アルコールの匂いが鼻を刺激する。

「誕生日おめでとう。乾杯」

「ありがとう。乾杯」

ぼくは初めてお酒を飲んだ。少しの緊張からかお酒の味ははつきりと分らないが、匂いから想像していたものよりずっと飲みやすかった。古酒だから味がまろやかになっていたのだら

うか。もしかしたらこれから、コーヒーだけでなくお酒も父との接点になるかもしれないと思った。

それから父は机に置かれたウイスキーを大事そうに手に取った。

「このお酒は人生で最も幸福な瞬間に飲もうとしていた。しかしその瞬間を逃さず捕まえるのは難しい。現在とは微分係数のようなもので、人生の曲線全体を把握できない。だから今日までずるずると延びてしまった」と父は言つて、箱からウイスキーを取り出し封を切った。

父は別のグラスを二つ用意して、ウイスキーを注ぐ。ケチャップの赤色とマスタードの黄色が混ざり合つて、綺麗な琥珀色の液体がグラスを満たした。品の良い甘い香りが広がる。飲んでみると滑らかな舌触りでクルミやドライフルーツのような複雑な余韻が長く続いた。煙っぼさの中に海藻のような潮気もあつて、飲んだ後に舌がピリピリする。初めて飲むには刺激が強かった。ぼくは水を入れたり、ソーダで割ったりしながら飲んだ。父は丸呑みすることなく、味わうように時間をかけて飲んでいった。

「今日が最も幸福な日になつてしまった」と父は飲み終えて言つた。

ぼくと父はそれから二十年の長い間を埋めるように様々なことを話した。これはお酒のおかげなのだろうか。お互い経験したことや思つていたことをすらすらと話せた。話題は途切れることなく二時間以上話していた。

「恋人はいるか」と父が聞いた。

「いないよ。もしいたらこんな特別な夜は恋人と過ごすに決まってる」

「それもそうだ」と父は笑った。「学校でかわいい子とは出会わなかったのか？」と父が聞いた。

ぼくは過去に出会った女子を思い出していった。そうとはいっても、ぼくが話したことある異性なんて、おそらく片手で数えて事足りる。「それはいたと思う」とぼくは答えた。

「そうか。それなら、恋をしたことはあるか」と聞かれた。

ぼくは多分ないと答えた。立派に恋と呼べるようなものではなかったから曖昧に返事をした。すると父は嘸みしめるようにゆっくりと話し始めた。

「恋を知ってしまうと、人は弱くなる。二人でいる時だけ世界が鮮やかに見えて、一人で過ごす何気ない日常が色褪せてしまう。景色のいたるところに相手の影が幻覚として現れて、乾いた一人だけの夜が苦しく耐えられなくなる。これが恋の毒に侵された人間の身に起こる症状だ。恋に落ちた罰だよ」

ぼくが黙って聞き入っていると、父は話を続けた。

「それでも、たとえ自分が弱くなったとしても、それを幸せだと受け入れることができたら、人は初めてその先で愛を見つめるのだろうな」と父は言った。老眼鏡をはずし曇ったレンズを拭いてテーブルの上に置いた。父の瞳は深く澄んで見えた。「ところでさっき、かわいい子と出会ったって言っていたな。それはどんな子だったんだ？」

「髪が長くて、かわいい声をした子だったと思う。でも遠い昔のことだからあんまり覚えていないや。遠くにあるものは、大体ぼやけて綺麗に見えるんだよ。ほら、ぼくの視力は〇・一しか

ないから」

「私も老眼鏡を外せばそうだ」と父は言つて、目にしわを寄せて笑つた。

「昔はその子が好きで、特別な人だと思つてた。だけど今になって思えば、ただ夢を見ていただけかもしれない」

「夢を見ていた？」と父が聞いた。

「そう、一瞬の夢。昔はお小遣いを貯めて買った百円のお菓子をお大切にしたいけど、アルバイトを始めたら、それがただおなかを満たすだけの食べ物に変わるみたいよ。そんな感じ」

「寂しいもんだな。私はもうお菓子を食べられなくなつたよ。とても甘すぎて食えやしない」

「ぼくもだんだん食べられるものが少なくなつてきた。健康を気にして人工甘味料のコーラを飲むようになってから、昔みたいに砂糖がたっぷり入つた甘いコーラを飲めなくなつたんだ」とぼくは言つた。「大人になるってこういうことなのかな」

父は少し悩んだような顔をして答えた。「うーん、難しいな。だけどその代わりに大人になれば、ホットコーヒーもお酒も飲めるようになる。それはそれで悪くないんじゃないか」

「たしかに、それもそうかも」とぼくは言つて、グラスに入つたお酒を飲んだ。「やっぱりぼくにとつて恋は、一瞬の夢のことなんだよ。眠りながら夢を見ているうちは、それが夢だと気づかない。言葉通り『夢中』になつてゐる。だけど目が覚めたら、ああ、あれはただの夢だつたんだなつて気づいて少し切なくなる。恥ずかしくなつたりもする。起きながら夢を見られないんだ」

どうしてぼくは恥ずかしげもなく父に恋について話したのだろう。理解して欲しかったのかもしれないし、あるいは父を試そうと思つたのかもしれない。すべてお酒のせいにしたかった。

しばらくして父は真剣な眼差しを言った。「もし恋をしていると自分で気づけたなら、決してその溢れる情熱から目を背けてはいけない。私は、お前が私でないから愛している。つまり、自分と違うものを持っていて、その魅力に惹かれるから、私はお前を愛しているのだ。離れることにより生まれるエネルギーを距離の力学と呼ぶとすれば、私とお前の間に距離の力学が作用して、愛する力が生まれている。だからもし心から情熱が溢れ出したら、それは行動する大きなエネルギーになる。その瞬間を決して見逃してはいけない」と父は言った。「私は幸福については知らないが、不幸についてなら知っている。不幸とは、幸福な瞬間に気づけないことだ」

父の透き通つた瞳にぼくは吸い込まれそうだった。ぼくの喉は父の熱に当てられて、からからに乾いている。グラスにウイスキーを注ぎ、半分ほど水を加えた。グラスをくるとまわせば、比重の違う液体が模様を描いてひとつに溶け合っていく。沈黙が二人の間の空気を支配して、そのいつもと違う沈黙にぼくは緊張した。それは光すら届かない海底に沈んだような沈黙だった。空気が体にびったりと貼りつく感覚はどこか水圧にも似ていて、耳に水が入ったように、ぼわぼわと音がこもる。ふいに窓に雨が当たる音が聞こえ、ようやくエアコンの稼働音も鮮明に聞こえるようになった。ぼくは窓を眺めて外で雨が降っていることに気が付いた。

父が考えこんだように突然ぼそりと呟いて、その沈黙を破った。「『かわいい』って一体何な

んだらうな。果たしてその『かわいい』はどこにあるんだらうか。我々の外側の対象物に宿るのか、我々の心にあるのか。それとも神か」

老眼鏡をはずした父の瞳はいつもより大きく見えた。父が思いがけないことを言うから、ぼくは少し驚いた。

「自分の脳が感動してかわいいと思うから、我々の心にあるんじゃない？」とぼくは答えた。

「それもあるかもしれないが、そもそも対象がいなければ心のなかにかわいいという感情は生まれにくい。一方で、対象が存在してもそれをかわいいと感じ取る個人の意識がなければ意味がない。『かわいい』は、主観と客観の融合において存在できるのかもしれない」

「自分と他人によって生まれる力だから、これも距離の力学だね」とぼくが言うと父は笑った。

それからぼくらは父の作品や芸術について話した。ぼくは自然な流れで片付けの時に見つけた赤い絵筆のことを思い出ししていた。

「そういえば今日部屋を片付けた時に、昔プレゼントしてくれた赤い絵筆を見つけたよ」

「ああ、懐かしいな。お前が毎日アトリエに来るものだから、絵を描きたいのかと思って画材一式あげたんだ」

「パレットとか絵具はどこに収納したのか忘れたけど、絵筆だけは机の引き出しに仕舞ってた」

父は少し黙ってから、ぱっとひらめいたように言った。「そうだ、絵筆を持ってこい。せっかくだしその絵筆で久しぶりに絵を描いてみないか？」

突然目を輝かせてそう言われて、断れなかった。どうやらぼくは、普段は物静かな父が生き生きと輝く瞬間にめっぼう弱いらしい。父がコーヒーを丸呑みするときもそうであったように。

父は二人分の画材を取りに二階に上がり、ぼくは部屋から赤い絵筆を取ってきた。ぼくはあれ以来ずっと絵を描いてこなかったが、今日なら父と一緒に絵を描けるかもしれない。父のせいで絵を描けなくなったのなら、父のおかげで再び絵を描けるようになるしかない。遠い過去を克服するなら今日しかないように思えた。奪われた黒の鳥を取り返さなければならぬ。

父は一階に降りてきてさっそく準備を始めた。ぼくらは同じひとつの林檎を別々のキャンバスに描くことになった。これなら昔のようにぼくの絵が父に侵略されることはない。父はテールブルクロスにわざとしわを寄らせて、その上に林檎を置いた。ぼくは絵筆を手にとって、白いキャンバスに赤い林檎を描き始めた。美術雑誌で多少知識はあったものの、描いてみると全くうまくいかない。あまりに難しく、知っていただけで理解した気になって自分が恥ずかしくなった。ぼくは集中して描き、三十分かけてなんとか絵は完成した。その林檎は、冷蔵庫の奥に忘れられて何か月も放置されたような林檎だった。たとえ砂漠で見つけても食べたくない。

ぼくは父がどのような絵を描くのか気になった。熟れて果汁の滴る艶やかな林檎だろうか。しかし父の絵を見ると、あっけなく裏切られた。父はキャンバスに何も描いていなかったのだ。

父は悩んでいるようだった。「林檎を描くには、林檎から離れて描かなければならないのだな。

林檎の表面に立っただけでは、林檎全体は描けない」と独り言のように呟いた。父はガラスの縁をなぞって、その奥底をじつと見つめていた。肩に乗ったフケは悩みが結晶化したように見える。

「ぼくの絵はどう？」と聞くと、父ははつと我に返ったようにぼくの絵を見た。

「ああ、良く描けているよ。確かに技術的に不足している所もあるが、これは誰が見ても林檎だ」と父は言った。「それはそうと、この林檎に芯はあるのか？」

「芯は描いていないけどある」と答えた。なるほど、芯まで想像して描けというアドバイスかと思った。けれどもそれは違っていた。

父は自分自身に言い聞かせるみたいに呟いた。「林檎の芯は赤い皮に包まれて見ることができない。もし見ることのできる芯が存在できるとするならば、林檎の芯は本当に存在すると言えるのか？」

「林檎を真っ二つに切れば、芯を見ることが出来るよ」

「確かにその通りだ。しかしその時には林檎は切り刻まれ、もう丸い林檎ではなくなっている。つまりね、芯を存在させるためには、林檎を犠牲にしなければならぬのだよ」と父は言った。

ぼくが何も言わずに黙っていると、父は話を続けた。

「だからもし人間の魂を存在させたいならば、人間の肉体は犠牲にならなければならない。あるいは芸術家が自分の中の美を具現化させたいと願うならば、その芸術家の肉体は切り刻まれて犠牲にならなければならない」と父は言った。「私が世界の美しさを描いた作品が完成した時には、もう私は世界にいないかもしれない。私は世界の外に立つから、世界全体を描けるのだ

から」

羽毛のような美しい白髪が、飛ぶ瞬間を待ちわびてじれったそうにふんわりと揺れている。

「そんな寂しいこと言わないでよ」とぼくは言った。

「お前は絵画がいつ完成するか知っているか？ それは芸術家が死んだ時だよ」

それからぼくと父は画材を片付けて、テーブルクロスを整えた。窓から見える空は白み始め、雨はすっかり止んでいた。時計を見ると午前四時を過ぎている。片付けを終えてぼくらは部屋に戻った。

「おやすみ」

「おやすみ」

部屋に戻ると途端に眠たくなった。これはお酒のせいだろうか。ぼくは部屋の電気を消して、ベッドに横になった。真つ暗な天井を見上げて、父との会話を思い出す。父が言っていた事の意味を考えたり、言いそびれたことを思い出して少し後悔したりする。でもそれらは朝になって聞けばいい。コーヒーマシンの淹れ方も教わりたいし、おすすめのお酒を聞いてみても面白いかもしれない。ふとぼくは今日、日記を書いていないことに気が付いた。一度も読み返したことはないが、毎日寝る前に日記を書いている。けれどもぼくは睡魔に襲われて、既に意識は遠くなっていた。そうだ、仕方ない。明日書こう。やがてぼくは深い闇にあたたかく包まれて眠った。

目が覚めると父はいなくなっていた。自殺だった。

ぼくはその日こんな夢を見た――

桜の樹が一本立つ公園でぼくはベンチに座っている。桜は枝を立派に伸ばし、その枝々に花びらをつけて満開に咲き溢れていた。桜の樹は高く伸びて存在感があり、そのせいで公園の遠近感がうまく掴めない。公園には白のワンピースを着た少女とその母親が遊んでいた。少女は長い黒髪で、おでこが広く、あどけない。まだ五歳くらいだろうか。少女は左手にシャボン玉液の入ったピンク色の容器、右手には緑色の吹き具を持っていた。母は平凡な装いをしている。少女は綺麗な透き通る声で高らかに歌った。虹色のシャボン玉が数えきれないほど、ふわふわ浮いている。

シャボンだま とんだ

やねまで とんだ

やねまで とんで

こわれて きえた

少女は気持ちよさそうに歌い終わった後、母にかくれんぼをしようと思ちかけた。母はそれに応じてオニ役になり、少女は桜の樹の裏に隠れた。桜の花びらが爽やかな風になびいている。

「もういいかい？」

「まーだよ」

「もう、いいかい？」

「もういいよ」

オニはその合図を皮切りに隠れた少女を探し始める。遊具の下や、(ぼくの座っていない)ベンチの裏などくまなく調べた。そしてついに少女が隠れる樹の前に立つ。

「みつけた」

その時オニの姿は途端に変貌した。オニの皮膚はめくれ、溶けた肉がぬるりと表れて、死臭があたりに広がる。オニの両目から溢れるように蛆が飛び出して、あるものは鼻の穴に入っていく、またあるものは鎖骨に転がっていく。オニの舌は唇の隙間から触手のようにぬるりと垂れて、唾液が少女の肌にかかった。少女の肌は次第にただれて腐っていく。オニは桜から養分を吸うようにずんずんと大きくなった。どろりと溶け、ぐちよぐちよの肉になったオニが、少女の体を飲み込んでいく。少女は悲鳴をあげるが、どうしてかその声はぼくには届かない。ぼくは彼女のところに近寄ろうとしたが、ベンチから一歩も動けなかった。声をあげてみるが、ぼくの声も彼女に届いていないようだ。オニは少女の右手から食べ始めた。そして二の腕、肘、肩、胸を噛みちぎる。醜いオニは血なまぐさい息を吐き、白のワンピースは鮮血に染まった。少女は、母に食べられたのだ。それは一瞬の出来事だった。公園には、もう純潔の白い薔薇の姿はなく、なまめかしい赤い薔薇だけが一本残っている。風に吹かれた桜の花びらはさらさらと舞い散り、血の跡の残る地面に降りつもる。そして一面に桜の花びらが敷かれ、大地を美しく染めた。

ぼくはベンチに座り、その一部始終をただじっと見ていた。そして夢の中で思った。

「アア、本当はぼくが食べようと思っていたのに。ぼくの麗しきアリス」と――

ぼくはアラームが鳴るより先に目を覚ました。朝七時二十分。起き上がるとぼくは夢精していることに気が付いた。初めての経験に困惑する。二十歳になりぼくは大人になってしまった。

二十歳最初の今日は、燃えないごみの日だ。昨日部屋を片付けた時に出てきたごみが二袋ある。シャワーを浴びた後、いつも通りごみを捨てて、歯磨きをして、二枚トーストを焼いた。そしてダイニングチェアに腰かけて父を待ってみるが、なぜかいつこうに現れない。毎朝欠かさず父とコーヒーを飲んでいるから、これはあり得ないことだった。

ぼくは父を起こしに二階のアトリエに上がった。早朝までお酒を一緒に飲んでいたので、おそらくまだ寝ているのだろう。十五年ぶりに見るアトリエは昔の記憶と変わらなかつた。イーゼルやペインティングナイフなど様々な画材が置かれ、絵具の独特な匂いがする。ぼくは父の寝室の扉をノックした。返事はない。しばらく待つて、ぼくは扉を開けた。部屋を見渡しても、父はどこにもいなかった。もともと存在していなかつたみたいだ。父の気配が失われていた。部屋には茶色の包装紙で包まれた大きな絵画だけがぼつりと残されている。窓から朝日が差し込み、壁に立てかけられ包装された一枚の絵画を照らしている。ぼくは縦横一メートルほどのこの物体を（なぜか中身を見ていないにもかかわらず）、それが絵画であると確信していた。ぼくはその絵画が気になって、勢いよくその包装紙をはがした。するとそこには、世界の美しさ

そのものであるような絵画があった。生と死の狭間、あるいは生と死の共存。ぼくはこの絵画を前にただ立ち尽くし、沈黙することしかできなかった。描かれているものを言葉では言い表せない。もし語ろうとすれば直ちに価値を失う、絶対的な神秘がそこにあった。ぼくはこの絵画を見て確信した。父はこの絵画を完成させたのだと。そして、世界の外に行ってしまったのだと。

ぼくは一階に降りた。おそらく父がいなくなることを、心のどこかで覚悟していたのかもしれない。なぜかあの夢を見たときに直感した。アリスの喪失が父からの卒業を招くことを、ずっと心の奥深くで知っていたのだと思う。理性的ではなく、本能的に。あるいはそれ以前の、父と話した瞬間からこの結末を予感していたのかもしれない。ぼくは不思議と落ち着いて冷静だった。

自分でコーヒーを入れてみようと思った。それは毎日の習慣になっていたから自然と浮かんだことだ。まずお湯を沸かしたが、コーヒー豆のありが分からない。ようやく探し出してコーヒー豆を挽こうとしたが、どれくらい挽けばよいのかも分からない。目分量で豆を挽き、粉をドリッパーに入れた。カンカンとたたいて粉を均す。ぼくは不器用にケトルを左手で回してコーヒーを入れた。陶器のカップにホットコーヒーを注ぐ。ぼくは椅子に腰かけてコーヒーを飲んだ。雑味だらけで濃縮された苦みに顔をしかめた。それはいつもの父の味ではなかった。それから冷めたトーストを二枚食べた。父が食べるはずだった分のトーストにかじりつく。孤

独の沈黙。その居心地の悪さに、ぼくはようやく父の死を実感した。ああ、もう父はどこにもいないのだ。あの優しく包まれるような沈黙も、あの苦いアイスコーヒーの味も、完全になくなったのだ。

ぼくはまた二階に向かった。父の絵画をもう一度見るためである。この絵画は何度見ても、そこには確かに額縁の中に生と死が共存し、美が具現化している。ぼくは作品に話しかけられたような錯覚に陥った。作品が鏡のように機能し話しかけてきて、思考させ、不透明な自己と対面させる。ぼくは絵画と対話して、内面と外面の境界を探ろうとした。まるで暗闇の中で部屋を歩き回り、自分を囲んでいる壁を探し確かめるように。そしてぼくは死について作品と対話した。死とはどういうものなのだろうか？ 父はどのような思いで自殺したのだろうか？

首吊り自殺する人は、その繩の輪からどのような世界を覗くのだろうか。服薬自殺をする人は、薬の効き目を待つ間何を考えるのだろうか。飛び降り自殺をする人は、そのふちに立ち見下ろす世界をどう思うのだろうか。もしぼくが自殺するならば、死後の世界は絶対の虚無であってほしいと考えた。地面もなく、摩擦もなく、空気もない、絶対の虚無。ぼくの死後に天国と地獄などの相対は不要だった。相対があれば、どちらが美しい、どちらが高貴だ、どちらが優秀だなどと比較され競争が生まれる。生きている間劣等感に苛まれて自殺して、その死後にも相対があるのならば、ぼくは生きていても死んでいても、どこにも居場所がないではないか。だから死後の世界には、何もない方が良いと思った。これは例えるなら、初恋と第二の恋愛の違いと

似ている。初恋はその相手のすべてを受け入れ永遠に続くように思われる。しかし第二の恋愛では、初恋の相手と相対して欠点が見つかり、自分が一度初恋の終わりを経験したように、第二の恋愛も一時的なものと思ってしまう。第二の恋愛では永遠と無限が破壊されるのだ。ぼくは死後の世界で、またその世界の終わりに怯えたくない。ぼくはただ、死後の世界にいる白い翼の天使と初恋をしたかった。まあ、そこは天国ではないのだから、天使もいないのだけれど。

考えていると疑問が浮かんだ。そもそもぼくは死んだことに気づけるのだろうか？ 死に気づくには、死を経験しなければならぬ。経験するためには、ぼくは死の「前後」を見届ける必要がある。しかし死んでぼくは既に存在しないのだから、「後」を見届けることができない。ぼくは死を経験できないのだ。もちろん他人の死ならば経験できる。その人が生きていた時と死んでからの日々を前後を経験することができる。しかし自分の死だけは経験できない。もしかしたら肉体が朽ち果てても、魂は永遠に存続するのかもしれない。そうすればぼくの魂は、火葬場で焼かれる過程を幽霊として見届けることができる。ここでまた疑問が浮かんだ。魂が不滅なのだとしても、死はやはり経験できないのではないか？ なぜなら不滅の魂は永遠に生き続けることになり、決して死ねないからだ。この場合にもやはり死を経験できない。ぼくは死に限りなく近づくことはできるけれど、死を経験することができないのではないか？ つまらぼくが自殺したとしても、無時間性という永遠の中で生き続けるのではないか？

だめだ。ぼくは、死ねなかった。



に望んで死んだのだ。一枚の絵画のために死ぬという奇矯な振る舞いは、多くの人にとっては狂気に思えるかもしれない。しかし父のような芸術家はそうではないだろう。芸術家は美を表現するための媒体として肉体を要請する。つまりその肉体が存在する意義は、美を生みだすためだけにあるのだ。だから生命とともに衰える肉体を犠牲にして、永遠の美を生みだすことは、芸術家にとって本望なのである。父の肉体は桜のように散り、絵画という不朽の花を育てた。死ぬ理由には十分なかもしれない。この絵画を生み出した後、人生最高の栄光の向こう側にはただ衰退しかない。そう考えれば父は最も幸福な瞬間を捕まえたのだ。芸術家が永遠に想像しても解明できない謎は「死」のみであり、あとは肉体的な勇氣を持って飛び、父は死んだ。美しく生き、美しく死んだ。ただそれだけなのかもしれない。

ぼくは死について考えすぎて、気持ち悪くなってトイレで吐いた。朝食に食べたトーストがポトポトと口から出る。その生暖かい液体が込み上げてくる苦しさと、口に残る不快な酸っぱさが、ぼくが生きていることを実感させた。

ぼくはそれでもまたアトリエに戻り、取り憑かれたように絵画を眺め続けていた。何時間経ったのかは分からない。絵画には瞬間の美が宿り、それが連続して時間性を持ち永遠の美を宿していた。平面作品にもかかわらず、立体的に飛び出してきてぼくを引きずり込もうとする。ぼくは目の前に具現化した美と無言のまま対話を続けた。人は絶対的な美を前にすると、沈黙することしかできないのだろうか。

ぼくはこの絵画は最上のものであり、未来に出会うどんなものよりも美しいと予感した。その予感は、人が未来の可能性を踏まえて、運命の人を決定する感覚と似ている。もうこの人より素敵な人は現れないから結婚しよう。そしてぼくは気づいた。この絵画が未来を含めて最上であるなら、ぼくは今後何に出会っても美しいと感じなくなるのではないか？ ぼくの外側の対象物に美が宿っているならば、ぼくは美に排斥されているのではないか？ 絵画が額縁の中に美を閉じ込めているなら、その外側の世界は醜いものになるのではないか？ 沸々と絵画に対して憎悪の感情が芽生えてきた。この絵画がぼくの未来を殺している。甘いキャンディーを舐めた後どんな魅力的な果物を食べても酸っぱく感じるように、この絵画の美がぼくの未来を色褪せさせる。ぼくのあらゆる感情は混乱して暴走しながら大きくなっていき、ふいにある恐ろしい計画が浮かんだ。まるで空気を入れすぎた風船が音を立てて破裂するみたいに、その計画は突然現れた。自分の心の中にこんな狂暴な深い闇が眠っていたことに驚く。口角が上がって、冷や汗が流れ、心臓の鼓動がうるさく高鳴るのを感じる。「そうだ、この絵画を燃やしてしまおう」と――

ぼくはこの突拍子のない発想を実行するために、何か言葉が必要とした。ぼくはたとえ使命としか形容できない行為でも、何か理由を必要とする性格をしていたからだ。言葉が体をやる気にさせる。ぼくの場合は精神の言葉の後、その標語に義務的に従った肉体の行動がついてきた。

ぼくは今日見た夢を思い出していた。そうだ、桜は散るから美しいのだ。永遠に残り続ける

絵画はただの造花でしかない。これは音楽も同じだ。音楽には終わりがあから美しい。それはひとつの短命な生物のように輝くから美しいのだ。美と死が重なる「桜は散るから美しい」というスローガンは、ぼくにこの儀式を実行させる勇気をくれた。ぼくはこの絵画の終わりを想像して身震いがした。想像はだんだんと現実味を帯びていく。不朽の絵画の終わりは、どれほど美しいことだろう。美しいものは燃やさなければならぬ！ 燃やすことによって、ぼくの外側に宿る美を、ぼくの中にしまい込むことができる。そしてこの絵画は誰の目にも触れなのまま、ぼくだけのものになるのだ。世の中かたちあるものはいずれ滅ぶ。それならば、手で燃やしてしまおうではないか。かたちあるものと、かたちないもの。そのいずれかならば、世界はかたちないものを尊ぶものだ。この絵画がかたちを失った時、真の意味でぼくの中に永遠の美が完成する！

一人の男が一枚の絵を燃やすのにこれだけの理由があれば十分だった。

それからの行動は早かった。ぼくはその大きな絵画を庭に出して、部屋からマッチ箱を取ってきた。バケツに十分な量の水を用意し消火の準備を終えた。ぼくは火事を起こしたいわけではなく、ただ絵画だけを焼きたいのだ。透き通るような群青の空の下、庭で木の葉の中に眠る絵画はミレイの『オフィーリア』のように美しく幻想的だった。深夜に降った雨が水たまりとなり、絵画は川に浮かんでいるように見える。ぼくは青空という決して手の届かない水面の下で溺れているが、その絵画は違って見える。絵画は自らの死の間際にもかかわらず、自分の運命

を受け入れ一切苦しみの表情を見せることなく、横たわり美しく眠っているのだ。ぼくはその絵画の周りを、口笛を吹きながらゆっくり歩いた。絵画は見る角度によって、全く異なるものになってしまう。すると、この庭はぼくだけの展覧会に変貌した。頭の中でムソルグスキーの『展覧会の絵』のピアノ演奏が鳴り響く。この組曲はもともとムソルグスキーが、画家ハルトマンの遺作展を歩いた様子や絵画の印象を元に作曲されたものである。その音楽は、庭で展覧会をしているぼくと過不足なく符号した。ようやく心の準備はできた。一人で生きていける。ぼくはもう、何も怖くない。

ぼくは絵画の前に立った。そして左手でマッチ棒を持ち、火をつける。手は微かに震えていた。一本目は風に吹かれてすぐに消えてしまった。ぼくは二、三本まとめて火をつける。しゅつと擦り、マッチの火は明るく燃えた。しゃがみ込んで絵画にマッチを近づける。すぐ絵画に火が移った。絵画は左端からみるみる燃えていく。辺りは煙をあげて、ぱちぱちと賑やかになっていった。ぼくはその様子をじっと見ていた。永遠のような一瞬。煙は高くのぼり、空に吸われていく。そして煙は果てしなく広がり、地球は美に包まれていく。額縁に閉じ込められていた美は解放されて、地球を美しく染めた。儀式は完了したのだ。ぼくの中に永遠の美が宿る。ようやくぼくは世界を正しく見ることができるようだ。父も絵画の美も、もう世界の中には決して現れない。

ああ、ぼくは生きようと思う。だって、世界はこんなにも美しいのだから——

ぼくは生まれ変わったように心が軽くなった。不可逆であるはずの時間が逆行して、たった今産声をあげたようにさえ思える。ぼくの頭の中のゆで卵は時間が逆戻り、どろりとした黄身がまた見えるようになったのだ。ぼくはこの二日間の出来事を日記に書こうと思ひ部屋に戻った。机の引き出しから昨日仕舞ったペンケースを出して、一本の青い万年筆を取り出す。硬く鋭い、金色の筆先。日付を書いて日記を書き始めようとした時、ふいに面白いことを思いついた。それは突然何かが降ってきたような感覚だった。昨日と今日の出来事を記録したいけど、読み返さなかつたら意味がない。ぼくはにやりと口角が上がるのが分かった。「そうだ、日記じゃなくて小説として書いたなら、未来の『ボク』も読み返すのではないか？」

そうしてぼくは小説を書くことを決意した。小説は一度も書いたことがないけれど、ぼくは居ても立っても居られなくなった。小説ってどのように書けばいいのだろうか？ どんな風にこの二日間の出来事を書こう？ 想像は大きく膨らみ、ぼくは興奮していた。

小説のタイトルは何にしようか悩んだ。父はどの作品にも題名を付けず絵画を描いたが、小説は言語で書かれるものだから当然タイトルは必要である。ぼくと父は違う。父が「描く」ならば、ぼくは「書く」のだ。ぼくは父から野口圭という名前をもらい、無言の父から言葉を授かった。だからタイトルは、これが言語で書かれたものだとすぐわかるものになろうと思った。もう父がいなくても、ぼくは一人で大丈夫だと教えられるように。それからしばらく考えて、ぼくはタイトルを決めた。未来の「ボク」にこれは日記ではないから読み返してほしいと願いを込めて、ぼくは一番目立つ分かりやすいタイトルを付けた。

これは、小説である！

ぼくは万年筆を手を取った。筆がひんやりと冷たい。その時ぼくは自分の体温に気が付いた。ぼくの命は燃えている。左胸が脈打っている。ぼくは間違ひなく生きている人間だった。万年筆を握ると、筆はそれに応えるように熱を持った。体温が万年筆に宿り、筆が生きて動き始める。金色の筆先がきらめいて、せわしく明滅しながら光り輝く。「そうか、これが命の重さなんだな」

ぼくは体中のあらゆる臓器からくまなく言葉を紡ぎだし、選び取る。言葉を取り除いたり、あるいは付け加えたりして、小説を削り上げていく。そうすると小説はたちまち、がらりと色彩を変えて、それがたまらなく面白い。音と音の余韻が連鎖して旋律になるように、筆が言葉から言葉へと軽々と舞い物語になっていく。ぼくは今、父が捨てた言葉を拾いあげている。そして父が捨てたこの世界を拾いあげ、言語の限界に向かって突進するように、内側から記述しているのだ。捨てる神あれば、それを拾う人間もいるのだ。

小説を書くというのは、体の内側から殺されるような作業だった。創作には必ず痛みが伴う。そしてその痛みで自分自身が弱くなっていく。しかしこの痛みは、ぼくが生きている証だ。ぼくは魂の奴隷のように死んだように生きている。そう、生きているのだ。ぼくは痛みを伴いながら、幸せを感じていた。そうか、これを恋というのだな。幸福はこんなに近くに転がっていたのか。ぼくは幸福を見つめる術を知り、愛を見つめることができた。ぼくがぼくであり、こ

の想像力が尽きない限り幸福であり、認識と行為により世界は変わったのだ。ぼくは想像の力により、起きながら夢を見ているように感じた。想像の中であれば、何者にでもなれる。靴のサイズがとても小さいハイヒールを履く女性にだって、結婚した乙女座の男性にだってなれるのだ。

万年筆はコントロールを離れ、自由に動き出す。旋律に乗り、リズムを刻んで、白い紙の上で黒のインクが躍る。ぼくはにやりと笑った。黒の文字だ。ぼくの美しい黒の鳥が再び戻ってきたのだ！ 一度傷ついた黒の鳥は不器用ながらに、けれども力強く飛翔している。ぼくはついに白と黒を等しく愛せるようになったのだ。白と黒がこの小説を鮮やかに彩る。まるでピアノの白鍵と黒鍵が色彩溢れるメロディーを奏できるように。あるいはモノクロの五線譜がカラフルな旋律を描くように。

ついにぼくは一遍の小説を書き上げた。小説を書き終えて、ぼくは父が言った「見ることにより林檎の芯が存在できる」という仮定は間違っていると考えた。たとえ見られなくても「林檎には芯が存在する」という言葉ならば、芯の存在を保証できるからだ。言葉は保証する、「ぼくは生きている」と。

ぼくはペンネームを考えた。未来の「ボク」も変わらず野口圭であるから、この小説のペンネームは違う名前にしたい。しばらく考えてから決定した。ぼくは父からもらった名前に人偏を付け、それをペンネームとして書いた。——野口佳——これはぼくが人間である証だ。

ぼくは小説の最後に未来の「ボク」へ手紙を残した。黒の伝書鳩が未来へ飛び立つのを夢見て。

〈ぼくから未来の『ボク』への手紙〉

君がこれを読んでいるのなら、君はまだ生きていたのだから。ぼくはそれをとて嬉しく思う。どんなに君が無名の人として生きていても構わない。ただ、生きてさえいればいい。ぼくは過去の君なのだから、ぼくだけは君を知っている。ぼくだけは君をちゃんと愛している。これも距離の力学だよ、時間という距離の力だ。何度でも言おう、ぼくは君を愛している。ぼくも君もこの世界で生きているから、摩擦があつて、空気がある。ぼくは摩擦のおかげで文字を書けるし、空気のおかげで声を届けることができる。「愛している」と。それって、とても素敵な事だろうか？

きつと君はぼくより年を取っているだろう。君はこれを読んで青かつたと嗤うだろうか。少し恥ずかしい気もするが、恥をかくのは何かに努めている証だ。悪いことじゃない。年を重ねることも悪いことじゃないはずだ。長く生きるほど、多くを経験して人生は美しくなっていく。山は高く登れば、その分息は切れ体力もなくなるけれど、景色はずっと美しく光り輝くはずだ。

この手紙はもう終わる。青春の終わりだ。さあ、この地球は君が立つ大地だ。大地があるから、君は一步前に歩き出すことができる。ぼくも君も弱いからこの大地に立っているんだ。ぼくらは生きている弱い人間だ。もし強かったのなら、とくに父のように空を飛んでいるか、首を吊って宙に浮いているはずだろうか？ ぼくらは弱いからこの地上に立っている。前へ一步踏み出せ。前はどこかと迷う必要はない。前とは、この小説を見ている目線の先だ。君のその目は、前を見るためについている。さあこの小説を投げ捨てろ！ ロケットが上昇した後、速

度を上げるため不要になった機体を切り離すように、進歩した君にはもうこの小説は不要である。小説を投げ捨てれば、君はこの素晴らしい世界を見ることができはるはずだ。絵画は燃やされ、宇宙は美に満ちているのだ。

……格好をつけて少しばかり強がりを書いてしまった。本当は投げ捨てた後、もう一度この小説を拾い上げて、そっと抱きしめてほしい。ぼくは寂しがり屋の、ただの弱い人間だから。

それから一年ほど経った。ぼくはアラームの音で目が覚めた。朝七時三十分。ぼくの家には、もうごみはひとつもない。というよりは、以前ごみであったものが、ごみではなくなったと言う方が適切かもしれない。判断に困るものはひとまず置いておけばいい。家は父がいなくなったことで広くなり、それだけの余裕があった。だからぼくは今日が燃えるごみの日なのか、燃えないごみの日なのか、もう迷う必要はない。

ぼくは朝食にトースト一枚とベーコンとスクランブルエッグを食べた。硬い殻は割られ、黄身と白身は一体となっている。味わって食べた後ホットコーヒーを飲んで、父の墓参りに行った。

ぼくは花を手向けてから墓の傍の木陰で休んだ。別に誰かを待っているわけではない。ただじっと座りたくなったのだ。涼しい風が木の葉を揺らし、陽だまりがしなやかに動いている。木の葉が揺れることで透明な風があることを教え、木陰があることで太陽の光の存在を保証する。亡くなった父に墓碑銘を残せるのは、ぼくが生きている証だろう。ぼくはふと、プロアル

コスという戦死した兵士の墓に刻まれた、女流詩人アニユテーによる墓碑銘を思い出した。死せる言葉による死者への呼びかけ――

勇敢だったがために、プロアルコスよ、君は戦いで斃れたのだ。

して、君の死によって、ペイディアスの館を暗黒の悲嘆に沈めたもの、

しかれども君が上に立つ墓石は、かかるうるわしきことばを告げる、

「これぞ愛する祖国のための戦い、斃れし者」との。　（『ギリシア詞華集』より）

空を見上げると、青色のカーテンを切り裂くように一本のひこうき雲が伸びている。ぼくは火葬場で高く昇った白い煙を思い出した。喪服を着て葬式で見た遺骨は白く美しかった。黒と白が同じ空間でひとつになり、空白の芸術家は空と白に染まったのだ。ふと、風が背中を優しく押した。ぼくは立ち上がる。風で砂埃が舞い上がった。ぼくは太陽のまぶしい光を見て、大地の砂埃を吸い込んで、風に体をくすぐられ、ひとときわ大きくしゃみをした。

野口 佳（のぐち けい） 琉球大学 理学部数理科学科三年

小説部門佳作

こうじき

香食

土木 団

……おお。夢か、幻を見ているのではあるまいか。今、目の前に見えるものは、神様のいたずらなのか。

ふむ、これは久しぶりの、ざらざらとした感触。どうやら、あなたは本物らしい。幻想なんかではない、本物の人間だ。何年ぶり、いや、何十年ぶりだろう！

ああ、大変失礼しました。ここへ来るのは初めてですね？ ようこそ、いらっしやいました。こんな場所に遥々お越しいただき、ありがとうございます。

私の名前、でございますか？ 失礼ながら、私、訳あって名前がありません。名乗ることができないのです。まあ、私のことは、どうぞ、好きな言葉で呼びください。

ここで、私ができる、最高のおもてなしをさせていただきます。そのために、私はいるのですから。

先ほどは取り乱してしまい、申し訳ございませんでした。久しぶりの出来事でしたので、年

甲斐もなく、随分とはしゃいでしまいました。といっても、私、年齢も無いのですけれど。ハハ、笑い話なのですよ。そのような怪訝そうな顔をしてらして。もっと笑ってくださいまし。私の方は、楽しくて、嬉しくて、仕方がないのですよ。笑みが止まらないのです。

ああ、この場所に、人がおいでになるのはいつ以来でしょうか。長いこと、私はここに独りでした。寂しかったのです。声を出すのさえ、随分、久しぶりです。

ハハハ、詳しく言わなくても、あなた様のお顔を見れば、考えている事ぐらいわかります。不思議に思われているのでしょうか？ 何故、このような無機質の塊のような場所に、私が閉じ込められているのか。

……ええ、私はここから出られないのです。壁も、床も、どこも開かないのです。

ここで過ごすようになって、幾年経ったのでしょうか。朝も、夜も、区別がつかないので、日の変わり様も一切、知ることができません。

それに、年数を数えても哀れになるだけだ、と気付かされたから、もう数えるのをやめたのです。何も変わらないこの場所で、指を折って数えても、ただただ、惨めなだけだ。

あなた様が、どのようにしてここを見つけ、執拗に私を目で追うのか、私の知るところではありません。しかしながら、せっかくお会いしたのです。私は一つ、あなた様にお話したいコトがございます。それは、私がなぜこの場所で一人、惨めに覗かれているのか、その理由です。あなた様も、そろそろ訊きたくなってきた頃でしょうか？

面白く無かったとしても、きつと、あなた様のお暇潰しには、なるかと思えますよ。

はじめに、気味の悪い温度を全身に感じました。

ひんやりとした、得体の知れない物が、頬やら手やらにべったりとくっついて、私の体を厭に冷やして来たのです。それが鬱陶しくなりまして、この気持ち悪い物の正体を見ようとして、フツと瞼を開きました。

そうしたら、何が見えたと思います？

ああ、あなた様は、そういうった質問はお嫌いみたいですね。

眼前に広がったのは白。まごう事なき白でした。それではと、こちらを見ても白。ならばと、仰向けになって、天井を見ても白。白。白。白……。どこを見ても白だらけだったのです。言葉のあやではなく、私を囲んでいる四隅全てが、白色で埋め尽くされていたのです。初めて目にした時、自分の目の黒い部分が、白く染まってしまったのかと勘違いしたほどです。

ああ、夢か、と、再度目を閉じました。これが、たまに見るといいう、悪夢というものなのだと、そう決めて。そうでもしないと、変に上がった動悸を鎮められなかったからでした。

しかし、地面から伝わる冷気が絶えず体を襲うものですから、深呼吸を二度ほどしてから、恐る恐る、目を開きました。

果たして、当たり前のように真っ白な壁が大きく開かれ、眩しく光を反射していたのです。思わず、私はヒツ、と声を上げてしまいました。

そして、甘草を焦がすような煙たい臭いを、うっすらと感じました。それも相まって、まるで、夢の中に閉じ込められたかのような気分陥っていたのです。ただ、その臭いの正体を知

るのは、もう少し後なのですが、普段なら一発で気づくであろう、その正体を見逃してしまいました。それほど、混乱していたのでしょうか。

今、自分が居る場所を確認しようとして、上体を起こしました。白い壁はやはり、幻や夢の類などではなく、実際にそこにあるようでした。窓のようなものもなく、見上げてみても、天井にはランプどころか、明かりを発生させるようなものもない。この部屋が、どのようにして明かりを取り入れているのか、甚だ疑問でした。そして、もっと不思議だったのが、いくら探しても、扉はおろか、人が出入りできるような穴ですら、見当たらなかつたことです。部屋である以上、出入口は最低限あるはずですが、この不気味な部屋には、それらしきものはありませんでした。つまり、密室でした。

そろり、と音を立てないよう慎重に起き上がり、私は無表情な壁へ近づきました。手のひらを密着させると、コンクリートでも木の板でもない、妙に弾力のあるような感触で、ズズズ、と壁に沈み込んで行きます。そして、あの得体の知れない冷感が、手を包み込むのでした。

ヒエツ、と間拔けな声を漏らして、私は埋もれていく手を、なんとか引っこ抜きました。この部屋は、まるで生きているみたいだ、もしかしたら誰かの胃の中にも放り込まれたのかも知れぬ。そのような不穏な妄想を幾度となく繰り返し返しました。この、ヒヤリとした冷感は、もしかしたら胃酸で、このまま、どこかの誰かも知らない奴に溶かされ、栄養にされてしまうのだ。そう思うと私は、白いまま、何も反応してこない壁や床に、恐怖を感じないではいられず、ソロソロリ、と後退りを始めたのです。

「ここはどこだ。他の人は——私の家族はどこにいるのだ」震えるような呻き声は誰にも届かず、白い壁に吸収されるばかりです。父や母、愛する妻や子供も、ここにいるのでしょうか。しかし、何度呼びかけても声は返ってこないのです。

その時、私は愚かにも、真後ろを確認しませんでした。パッと見た限り、この白く不気味な部屋は、真四角の形をしていたものですから、普通に考えれば、背中は反対側の壁にぶつかるはずですが、ですが、その時は違いました。

ドン、と固い音がして、それから、足に何かを感じました。それに気づいた時には、私の体は面白いようにバランスを崩し、景色が真逆さまへと落ちていくのでした。

その時、チラリと視界の片隅に映ったものに、私はゾッといたしました。最初に弁明しておきますが、それは、壁や床と同じ材質でできているらしく、また、色も同じ真白であったため、気づきにくいものだったのです。

が、錯乱している私には、そこまで考えが至らず、なぜ、こんなものに気づかなかつたのだろう、と更に自らを疑ったのでした。思えば、おかしくなっていたあの時から、部屋に閉じ込められる運命が決まっていたのかも知れません。

私がぶつかったもの。それは、仏壇でした。汚れのない、疑いようのないほど白で出来たそれは、ある種、美しいとさえ、思う人がいるでしょう。ですが、白い密室に置かれているのなら、そして、密室に閉じ込められた人が、それを見たならば、誰もが、自ずと気持ち悪い、と答えるでしょう。実際、私は背筋が徐々に凍っていくのを感じました。そして、その白い仏

壇は自分から、その重厚そうな扉を、無音で開けたのです。その中には、これまた白い蠟燭と、一筋の煙を絶えず出す白い線香（目覚めた時に感じた臭いの正体、それはこの線香が出す煙でした）、それから、一冊のノートが置かれていたのです。

そのノートは既にボロボロで、かなり分厚いものでした。私は普段から、本など読まないものですから、それが、どれほどの頁数なのか、わからなかったけれど、人の掌ほどの幅があり、ノートとしてはかなり量のある物でした。白い表紙には何も書かれておらず、ただ、題名を書く欄の空白が、虚しく、私を見つめるばかりでした。

その時、何を考えたのか、私の右腕は、仏壇のノートへ、私の気付かぬうちに、手を伸ばしていました。何もなかった白部屋の、突如現れたものに、一握の希望を抱いたのかも知れませんが、このノートには、ここから脱出するための方法が書いてあるのだ、と。

しかし、そこに記されていたものは、より私を不安にさせるには十分な、奇妙な文字列でした。

イチモンジ シュンタロウ

溺死

タテミチ ケイジ

餓死

ツカヤマ ハルカ

毒死

イワウチ	マサアキ	凍死
ヤチダ	チサト	爆死
カンムリ	ヨシト	圧死
ナツノ	スズカ	燃死

最初に、この手書きで端から端までずらりと書かれていた文字を、私は理解できずに、ただ目で追っていました。しかし、徐々に理解していくうち、背中に氷水を掛けられたような悪寒を覚えました。手に取ってしまったことさえ、激しく後悔しました。ああ、きつとこれはここで殺された人の名前だ、そして記述されている死に方で、私は誰にも知られず死んでいくのだ、と、気味悪い妄想は、また加速して行くのでした。

しかも、ページをめくればめくるほど、その奇怪な文字列が、大人しく綺麗に整列して、隙間なく並べられているのです。もしかすると、私の名前がもう書かれているのかも知れない、と、その恐ろしい記述を、自棄になりつつ血眼になって読んでいた時、

「供養だよ」

と、背後から、腹に響くような低い声が背中に垂れました。びっくりして振り向くと、そこには、いつの間にかこの部屋に来たのか、杖をついた一人の老人が、こちらを睨んでおりまし

た。

彼は古く、灰色の褪せた紳士服を、八の字の肩に着せていましたが、震える手で杖をついているにもかかわらず、スラリと真直な姿勢は、紳士、とでも言うべきなほど、よく似合っていました。ただ、垂れた皺だらけの顔にくっついていて、整えられた白髭、シルクハットの隙間から覗く白髪と、こちらを貫く鋭い視線は、老衰と少壮がチグハグにくっついていっているような、非常に不気味な印象を、私に与えました。

私はこの時、閉じ込められた仲間がいた、と安心すると同時に、非常に小さな、だけど無視することのできない不思議な違和感を感じていました。それは老人の見た目、というより、私自身に対するものでした。ただ、それよりも目の前の、この謎の男に対処しなければならず、この時はすぐに忘れられました。それよりも、やっと人に会えたという安心感が脳を満たし、私はホッと一息ついて、彼に話しかけました。

「ああ、あなたも閉じ込められたんですね。落ち着いてください。私も閉じ込められたのです。それで、あなたは誰ですか？」

最初に彼に問うた言葉は、確かこんなだった気がします。他に訊くべきことはあっただろうに、と思われるかも知れません。ですが、あの時の私は、変なノートのせいで気が動転しているところでした。そこに突如現れた老人へ、自分は一人ではないのだ、と人心地の良い感情が溢れたのです。一瞬の気の緩みが出ってしまったのです。

しかし、その質問こそが、後々重要になってくるのですが、当時の私には思いもしませんでした

した。

「私は、しがた作家さ」

老人は、白髭を、震える右手で撫でながら、そんなことを言いました。

「なぜ、こんなところに」

「はは、決まっている。懺悔のためさ」

咳まじりの湿った笑いをした老人は、私の問いに答えました。声が反響して、彼は私に、不気味な印象を与えたのです。先ほどまでのホツとした感情はどこかへ消え、心臓を握りつぶしてしまいそうな痛みが、キリキリとし出すのでした。

「懺悔？」

思わず、聞き返してしまいました。

そして、彼が紡ぐ返答に、自分の口を呪いました。

「懺悔だ——私は数多の人間を、殺してきたのだから」

——殺した。

その言葉に、思わずギョツとしました。この奇怪な部屋に来て、何度経験したか数えきれないほど、背筋に悪寒を感じましたが、この時は全身の震えが止まらないほど、恐怖を感じました。殺した、と老人は、はっきり申したのです。動揺するのも無理はありません。彼の持っているその杖ですら、あの時の私には、鋭く尖ったレイピアに見えてくるのです。

しかし、私とはまるで逆、タバコを吸ってバスを待っているように、彼は非常に落ち着いた

様子で、帽子の角度を整えておりました。この時、彼の鋭い視線がチラリ、と私の背後に移動したのを見逃しませんでした。最初、その視線の意味がわかりませんでした。ハツとして振り向くと、果たして、奇妙なノートが視線の先に居たのです。

再度、私はハツとしました。この中には名前と、様々な死因が記述されていたのです。

「そのノートか。私が殺してきた人間の名前だ」

私の脳内を読んだのか、おどろおどろしい声を私にかけました。そこには、まるで何かに怯えているかのような、少しの震えが混ざっていましたが、私がそれに気づくのはだいぶ後になってからでした。

再度、ノートを開くと、先ほども見たはずなのに、その時とは違う、寒々とした、理解できない恐怖を文字から感じたのでした。

「なぜ、殺したのですか」

ガタガタと震えながらも、私は興味に勝てませんでした。

ふむ、と小さく呟いた、老人の答えは非常にシンプルでした。

「必要だった。それだけだ」

簡単にそう言いかけた彼は、相変わらず私の背中に喋りかけています。その度に、背筋が細かく揺れて、キリキリと痛むのでした。

またノートを開き、私は無機質な黒の筆記体を、悲哀の目で見つめました。ノートを優しく閉じ、そして、彼に向き直りました。今度は何か、義憤のようなメラメラと燃える熱い感情を

携えて。

私という男は、なんと可笑しいのでしょうか。知らない男に、知らないノートを見て、勝手に自分の想像で怒るのですから。とんだ主人公取りだ。全く。なんと愚かなことか。

……失礼。この時は、自分が成敗せねば、と場違いな決意を持っておりました。それで、ゆくりと口を動かして彼に訊いたのです。その質問は、私が特に知りたかったことの一つでした。こんな謎の部屋に閉じ込められてなお、人間という生物は目の前の疑問に食いつくのです。

「なぜなのでしょう？」

それを聞いた彼は少し口を歪め、下を向き、しばらくしてから、呻くように言葉を口にしました。

「二十ページ、三行目」

唐突に言い出した言葉の意味を、しばらく理解できずにいました。ですが、ハツとして、仏壇に置かれたノートに駆け寄って、急いで開いたのです。彼の言うページを探すと、そこには「ヤマモト タカシ 毆殺」と、特段変わったことのない（そう思った時点で、私はもう狂気に飲み込まれていたのでしょうか）文字が書かれてありました。

「彼は、密室の中で殺された」

言葉が続ける老人に目をやると、懐かしそうに、目を細めていたのです。

「生きたまま、手足を縛られ、石で何度も何度も、殴られた。人とわからなくなるぐらいに。

私はそれを柘榴のようだと表現したがね」

彼の淡々とした語りを聞いて、私は身も心も震え上がりました。言葉を紡ぐたび、私の脳内に情景がいやと言うほど書き起こされました。

「三十八ページ、五行目」

またもや彼が唐突に言葉を放つので、私は言われた通り「エガワ リヨウ 毒死」と書かれた所へ目をやりました。

「彼女は哀れにも連続殺人の一番初めに殺された。口から血を吐き出し、その血で腹に蝶の絵を描かれ、さぞかし不快だったろう」

彼の話を聞くたび、私は違和感を感じずにはいられませんでした。なぜ彼は、こんなにも人を殺しておきながら（しかも必要だったから、と言っておいて）仏壇なんてものを作ったのでしょうか？ しかも、ノートに書かれてある名前と死に方を全て覚えている。間違いなく重罪である『殺人』という罪を犯しておいて、彼のその言動が不思議で不思議で……。ノートを閉じて仏壇に戻しつつ、私の頭は、さまざま可能性を、書いては消し、書いては消し、を繰り返していき、彼と視線が交差した時には、結局、彼の言動を理解することはできずに、ただただ、しわくちゃの手が撫でる白髭を睨むばかりでした。

そんな感情が顔に出ていたのか、彼はニタリ、と笑ってこちらへ言葉をやりました。

「不思議かね。私が弔いの気持ちを持っていることが。なにもおかしいことではない。人間は死者の冥福を祈るだろう。私も彼らを同じように弔っているのだ。彼らは、私の身勝手に死んでいった者たちだから」

身勝手……。コツン、と杖を鳴らし、淡々と言葉を並べる彼の意味不明な言動に、私は長考せざるを得ませんでした。すると、ある重大なことに気づいたのです。警察でもない私の気づきなど、間違っている方が当たり前なのですが、まあ、聞いてください。

彼は先ほど『人間は』死者の冥福を祈る、とそう言いました。そんなところを強調させなくてもいいはずですよ。とすれば、彼が殺した、と言っているのは人ではない……？ この時、私はある、奇怪な可能性がよぎりました。それは、考えようによっては、非常に恐ろしいものですが、この時の私は、これが正解だ、どうだみたか、とまるで私立探偵にでもなったかのよう

に錯覚していましたから、信じて疑わなかったのです。

今度は、私は自信たっぷり、彼に言葉をかけました。

「そういえば、あなた、小説家でしたね」  
そう言うから私は思わず、ワハハハハハ、と、笑ってしまいました。その声は、今の私と同様に、密室空間で行き場をなくし、反響して元の場所に戻ってくるので、まるで私が何人ものいるかのように、何重にも聞こえてきます。ひとしきり笑い、落ち着いてから私は言葉を続けました。

「ああ、すみません。あなたを侮辱したわけではないのです。少々驚いてしまって。私は少々勘違いしていたようです。現実でたくさんの人間を殺したのかと、勘違いしましたよ。あなたの『創作した物語の中』で死んでいった人たちなのですね。ああ、喋りすぎてしまっ

せん。早口で聞こえづらかったかも知れないですね」

呼吸のため口を開く、そのたびに、安堵のせいからか、笑みが溢れておりました。この時、私はこのノートに書かれていた彼らたちの名前が、突然なんの意味も持たない、ただの文字列にしか見えなくなりました。この奇妙な部屋に奇妙な仏壇、果ては奇妙なノートに、私の精神はかなり参ってしまっていたのでしょうか。声を出すたび、胸筋の力が抜けていくのです。

つまり、彼の言っている『殺人』とは、言わば想像上の出来事なのです。作家、しかもミステリーやスプラッターを書く人は、物語に緩急をつけるため、作中で人を殺さなければならぬ。

彼は『弔い』と言っていました。登場人物を人間と同じように弔っているのでしょう。すなわち、ノートに書かれた名前も、死に方も、全ては創作の中で起きたことで、それが実際に起きたわけではないのです。実際に起きたなら、彼は名の知れた殺人者になってしまう訳ですから、私でも知らないはずはないでしょう。

と、そのような内容の推理を、したり顔で披露した私ですが、老人は相変わらず、私を鋭い目で睨みつけておりました。

「なにを言っている」

老人の、その弱々しい体から出たとは思えない、低い地響きのような声が、私の体を揺らします。その獣と紛う声にびっくりして、笑いをピタリと止めて、もしや間違っていたのかしら、と慌てて口を押さえました。

「わしにとっては物語の中も現実だ」

ギリギリ……と、歯を噛み締める彼は、ジリジリと私に一步步近づいてきながら、言葉を

吐き出しました。

「我が子たちは、活字の中で息をし、ページの中で暮らし、本の中で生きているのだ。惨たらしく活字で死んだ者にも、現実で生きる、私と同じような人生があったのだ。それをなんだ、お前は、笑うのか。人生を笑うのか。生きた証を笑うのか」

彼は、今までの態度からは想像できないほど声を荒げ、私に唾を飛ばしました。唐突にそんなことが起きた物ですから、驚いてしまつて、身体が固まつてしまいました。

「わかりました、わかりました」

いつの間にか、私は彼を落ち着かせようと、彼の肩に手を乗せていました。杖を、ギリギリと強く握りしめている、彼のその怒りを目にした時、私は早くここから出たくなつていたので、ここに来て、私はやつと思ひ出したのでした。老人が、この部屋に唐突に現れた、奇妙で不気味な者だと。その瞬間、私は彼と目を合わせたく無くなって、彼の肩に乗せた手を、思わず離してしまいました。

「も、もういい。あなたが言いたいことはよくわかりました。侮辱したことも謝ります。それで、この場所から出る方法を教えてください。もう散々です」

もはやその言葉は、神頼みのような眩きでした。しかし気づくと、先ほどまで口うるさく罵つていた老人は、その言葉を聞いた途端、少々眉をピクリと上げ、それから腕を組み、何かを考え始めたのです。

その一連の動きに、私はもうすっかり恐怖を感じていました。このたった数ページの間で、

私は感情がごちゃごちゃに入り混じり、まるで長い事走ってきたかのような、肝の軋みを感じていました。

できることならば、もう早くここから出たい。ここに来て、最初に目覚めた時と同じ願いを有することになるとは。なんとも皮肉なものです。

しばらく老人は腕を組んだまま、動かずにいましたが、また杖をコツンと鳴らせると、口を開きました。

「ない」

彼はたった二文字、ポロリと言葉をこぼしました。その断言ぶりに、軋んだ肝がつかえるような気がしました。怒りとも呆れとも違う、疑問のようなものを感じたのです。

「なぜですか？ あなたはどこから現れた。ならばここに『入ることができた』はずだ。ドアでも窓でも穴でも。なにかしらあるはずでしょう」

老人は髭を一つ撫でつつ、ふむ、と言いました。

「そうかもしれない。だが、ここはすでに『物語』の中。ここから出られる方法は無い」

私は理解が及ばず、頭の中は疑問だらけでした。そんなことを淡々と伝えてくるこの男に、より恐怖を抱いてきました。

「ここが物語の中だということとは、もう君は知っているはずだろう」

そう続ける老人に、私は眉を顰め、首を二、三度横に振ります。何を言っているのだろうか、この人は——確かそんなことを思っていました。

一つ、大きいため息をついた彼は、懐から数枚かの原稿用紙をこちらに差し出してきたのです。震える老人の手からそれを奪い取った私は、中を見て、そして、その意味を理解した後、しばらく呆然としていました。

## 香食

土木 団

……おお。夢か、幻を見ているのではあるまいか。今、目の前に見えるものは、神様のいたずらなのか。

ふむ、これは久しぶりの、ざらざらとした感触。どうやら、あなたは本物らしい。幻想なんかではない、本物の人間だ。何年ぶり、いや、何十年ぶりだろう！

ああ、大変失礼しました。ここへ来るのは初めてですね？ ようこそ、いらっしやいました。こんな場所に遙々お越しいただき、ありがとうございます。

私の名前、でございますか？ 失礼ながら、私、訳あって名前がありません。名乗ることができないのです。まあ、私のことは、どうぞ、好きな言葉でお呼びください。

ここで、私ができる、最高のおもてなしをさせていただきます。そのために、私はいるので

すから。

先ほどは取り乱してしまい、申し訳ございませんでした。久しぶりの出来事でしたので、年甲斐もなく、随分とはしゃいでしまいました。といっても、私、年齢も無いのですけれど。ハハ、笑い話なのですよ。そのような怪訝そうな顔をしてらして。もっと笑ってくださいまし。私の方は、楽しくて、嬉しくて、仕方がないのですよ。笑みが止まらないのです。

ああ、この場所に、人がおいでになるのはいつ以来でしょうか。長いこと、私はここに独りで

——こういったような文章が、何枚にもかけて書いてあったのです。はじめとおわりのページ以外は、見覚えがあるものでした。

私が、この白く呪われた部屋に来てから今まで、言葉、動き、考えていることが、この原稿用紙に、まるっきり、そのまま、全く同じに記述されていたのです。気持ちが悪いくらいに。これが示すことは、私は最初から、この白い部屋に閉じ込められることが決まっていた、ということ。そして、全てこのヘンテコな『香食』と銘打たれた原稿の筋書き通りに進んでいる、と彼は言いたいのです。

最初に書かれたページは、あの時、覚えがありませんでしたが、これは今日、あなたが来た時のことを記述していたのです。

もうお気づきでしょうが、私は、あなたがここへ来て、この物語を読むのを前から知っておりました。ここへ訪れ、私を見つけるのだと。あの老人が書いた原稿用紙、その最初に書かれ

た文章に記述された、誰かが来るのだ、という証。私は、今日と言う日を待ち望んでいたのです。

……さて、お話に戻りましょう。

初めてこの原稿用紙を見た時、私は一種の強迫観念に囚われてしまうことになりました。この正体は、後々分かることなので今は説明をいたしません。ただ、それは非常に恐ろしく、また、私自身を否定するものだったので、その馬鹿げた考えが浮かんた瞬間、頭から振り落としませんでした。

そうして、原稿を読んでいるうち、私は一つのことになりました。あまりにも不思議な事でありましたから、確認するように老人に目線をやりました。きつとわかっていたので、彼は、首を一度、縦に振りました。

「土木 団とは私のことだ。私が、この物語を書いた」

その言葉が意味することは、私には少々理解し難いものでした。いや、特別な意味なんてなかったのかもしれない。そのままの事だったのです。この不気味な、私の言動を予言する原稿は、こちらにも不気味な、灰色の紳士服を着た老人が、その震える手腕を駆使して書き上げた、と言います。なんとまあ、奇妙なことでしょう。つまりそれは、小説家である老人が、自分自身の物語に吸い込まれてしまった、という事なのです。そして、私はその奇怪な老人の行動に巻き込まれてしまい、一緒に閉じ込められてしまったと、そういう事らしいのです。うんざりしました。

さらに彼は「私は、望んでここに来たのだ。自らの意思で、この部屋にいるのだ」と、言葉を続けたのです。

これまた奇妙な話ではありませんか。望んで、自分の書いた物語に入るといふ、なんとも不思議な話だろうか。それこそ、物語のネタにでもなりそうな出来事でしょう。

「贖罪のためさ。これが、彼らに対して唯一できることだ」

前にも聞いたようなその言葉を、半ば呆然とした状態で聞いておりました。自ら書き上げた小説に、自ら入る。このような行動に、なぜ私が巻き込まれなければならないのでしょうか。当然、理解が及びませんでした。

「それではなぜ、私はここにいますのですか？ 贖罪なら、あなた一人でやればいいじゃないですか」

私はそう彼に伝えると、しかし、老人は横に首を振り、

「ダメだ、それではダメなんだ」

と、言葉を撒き散らしました。その目が、暗黒という暗黒を全て集めて、煮切ったようなダス黒さを宿すのです。「なぜ」とは聞けませんでした。

「わ、私はなにも関係ないでしょう。さっさと出してください」

恐怖が滲み出たのか、意識せずに声が震えます。この時は、うんざりするほどの白い壁や、老人の杖ですら、もう目に入るもの全てが、今か今かと牙を剥いてくるのでは、と不安でした。

「無理だ。お前は出られん」

冷ややかに、彼はほとんど叫ぶようにして言いました。

「しかし、あなたは作者のはず。物語の外から来たのではないですか？」

馬鹿馬鹿しいと思いつつ、その疑問を彼にぶつけると、彼は「ああ」と一言つぶやき、頭を数度、掻きました。それから、杖を支えにして猫背になって、ぐっと私の方へ顔を近づけ、しわくちやの、震える人差し指を下に、床に向け、

「お前は最初からここにいた」

と言ったのです。その突拍子な言葉に、私はすぐ、躍起になって言葉を投げかけました。心の底から湯のように湧き出る恐怖に、打ち勝とうとしていたのです。

「いえ、私はいつの間にかここに連れてこられたのですよ。目が覚めると、ここにいたのです。もう、こんなところ、居たくありません。母や父、妻に子供が待っているのです」

私は、パニックにでもなったように、彼に大声を浴びせました。叫び声は何度も跳ね、私の耳に返ってきます。

老人は笑うことなく、その冷たい目を細くして、私の顔の一つ一つのパーツを見つめながら、相も変わらず髭を触るのでした。私も負けじと彼の目を睨み返すのですが、彼の目に灯る、ギラギラとした黒い炎を眺め続けると、なんだか、私もおかしくなってしまうような気がして、気づくと目を逸らしていました。

老人は、髭から手を離れたかと思うと、口を開きました。

「お前は過去を思い出せるか」

その問いがあまりにも突拍子めいていたので、私は閉口してしまいましたけど、彼が顎をいやらしく催促するように指ししてくるので、少々イラつきながら答えました。

「過去だと。簡単だ。なんだったらあなたとの会話、一語一句答えられる」

「いや、そうじゃない」

老人は首を横に振りました。私がさらにイラついたのはいうまでもありません。私の表情に、怒りの色が見えたからか、老人は諭すような口調で、

「この部屋に閉じ込められる前の記憶を思い出せるのか、と聞いているんだ」

と言いながら、やはり髭を触りました。

その言葉に反論しようと、私は大きく口を開きましたが、その後に言葉は続きませんでした。ずっと、不思議だったのです。私はこの老人と、最初に会った時の違和感の正体を、この時、初めて気づいたのです。

例えるなら、喉に刺さった小骨が悪さをして、物事に集中できなかつたのが、ふとした拍子にポロリと取れ、脳に掛かっていた霧が一気に晴れるような、ある種、心地良いぐらいの気づきでした。それは、非常にありきたりで簡単な質問でした。

（私は、誰だ？）

この部屋の奇妙さ故に、全くもって失念していた質問でした。私には、この部屋に訪れてからしか、記憶が無かつたのです。

私の名前も、年齢も、身長も、体重も、家族も、元いた家も、場所も、何もかもが思い出せ

ないのです。抜け落ちてい、というより、生まれたての子供のような、何も知らない無垢である、そんな心持ちでした。唯一、私のことを待っている家族のことを思い出しましたが、こられた『居る』という記録だけを覚えていて、どういう出会いだとか、いつ子供が生まれたかどうか、そういった記憶が私の中に無かったのです。

地面が、鉄からゴムに変わったような、ぐにやりと曲がって、足元を歪ませる、そんな幻影を見るほど、私は動揺していたようでした。ふらふらと、倒れそうになる体を、なんとか踏み張りつけ、足に力を入れて防ぎました。そうでもしなければ、私の中に築き上げられた自我が、倒れそうになる身体と一緒に、崩れ落ちてしまいそうだったからです。恐怖でした。この部屋に来て、白い部屋や老人に恐怖していた私が、初めて、自分自身に恐怖したのです。ゆっくりと、手を自分の顔に伸ばしました。ペタペタと、形を確かめるように手のひらを這わせます。少し窪んだ目、飛び出た鼻、皮の吸い付く唇、滑り台のように出っ張った顎、厚い皮膚の裏に閉じ込められた頭蓋骨。私の顔を形成するパーツが、私のものではないように感じられたのです。ここには鏡などありません。あるのは、ただただ白のみを跳ね返す部屋があるだけなのです。

私は誰。

その問いに対する答えをくれたのは、やはり老人でした。しかし、それは一度軽い気持ちで想像して、私自身を否定するから違う、と振り切った、あの悪趣味で狂った妄想と、全く同じだったのです。

「お前は、私が書いた物語の登場人物の一人にすぎない。お前はただのキャラクターなのだよ。お前の設定を『男で、人間で、若者で、家族を持ち、怖がりで、目が覚めた時に閉じ込められている』程度の設定しか作っていないのだ。お前は、物語の人間で、最初からここに閉じ込められることが、私によって決められていたのだ」

彼の、その容赦ない雨のような冷たい言葉に、私は打ちひしがれていました。もしも、それは違うぞ、私は生きている、私は物語の人間など断じて違う、と、言うことが出来れば、まだ変わったかもしれません。

しかし、否定ができません。もしかしたら私は物語の住人なのかもしれない、という考えが、頭の片隅で生まれて、それを完全に否定できないまま、疑念がどんどん大きくなって、私の脳のあらゆる場所に根を張って、支配してしまっただけです。

そして、その考えに乗れば、なんとなく、楽な気がしました。これは今、考えても理解できないのですが、あの時の私は、存在理由を求めていたのかもしれませんが、どんな人間でさえ、存在には意味があります。同じように、どんな物語でさえ、キャラクターの存在には意味があるはずなのです。物語に関わりのないキャラなど、細かく描写する必要はないのですから。

動揺して目の焦点があってない私を、責め立てるように、老人は、低く、腹の底から震えるような囁き声で、

「ノートを見てみる。最後のページを」

と、私に言うのです。

私は恐る恐る、ノートを開いてみました。もしや、すでに私の名前が描かれてあるのでは。ペラペラとめくる手が、ガタガタと震えていました。彼は登場人物を殺した、と言っておりました。その言葉を聞いて、先ほどまで、なんだ、創作上のキャラを殺した、と言う意味だったのか。と笑っていた自分自身が、その創作上のキャラだと知った途端、死にたくない、死にたくない、と呪詛のような言葉が、ポツポツと口から漏れ出てくるのです。今思うと、阿呆らしい、と笑ってしまいます。呻くように眩きながら最後のページを開き、私は涙目で、そこに書かれた名前を順番に、読んでいきました。

最後の一行、私はその名前を目にしました。それは、確かにどこかでも見た覚えのある名前でした。そして、あなたも、確実に、目にしたはずの名前です。

### 『土木 団 老衰』

他の文字とは違い、力のない灰色で、唯一漢字で書かれたその名前を、繰り返し読みました。数回、読み直して、私はその名前の持ち主を頭の中から探しました。驚くほどに、答えはすぐに見つかりました。

ついさつき、老人から差し出された原稿用紙に筆者として書かれていた名前でした。あなた様も、この物語を読んだ時の最初のページ、その二行目に、名前をご覧になったはずですよ。

「私の名前だよ」

頭の中を読んだのか、もしくは原稿にそう言うことが決まっていたのか、妙にちよいどいいタイミングで、老人は笑いました。その声は湿っぽい咳に隠れて、少ししか聞き取れませんでした。

「私は、自分の都合で殺した彼らを供養せねばならない」

ゴフツゴフツ、という、聞いていて不安になるような、粘液の混じった咳に、辛そうに顔を顰めながらも、彼は言葉が続けます。目には力がこもっているのか、黒い球がしきりに不規則で動き回りながら、こちらを捉えていました。

「だが、私の死期は着々と近づいている。今も、静かに忍び寄ってきている」

それを裏付けるように、彼のしわくちゃな口からは、タラリと赤い一筋が顎へ伝っていき、地面に赤のシミを作り出し、染み込み広がっていくので、白い海に大きな赤い島を作り出しました。

「私が死んだら……供養するべき彼らはどうなる。彼らの魂は……」

老人はこちらを、先ほどよりも優しい目をして見つめました。あまりにも穏やかすぎて、少々驚いてしまいました。

「そこで生まれたのが君だ」

彼はそう言うと、私に歩み寄ってきました。震える足で、一歩ずつ。私は逃げることもできただけ、足が動きませんでした。それに、逃げてなんになると言うのでしょうか？ ここには逃

げられる場所など、ハナから無いのです。

「君にお願いが、あるんだ」

老人のゴツゴツとした手が、私の肩に触れました。力のない、時折震える亀のような手でした。

「私の代わりに彼らを見守ってほしい」

その手はとても冷たく、命の温かみを感じません。と言うより、目の前に佇む彼の目からは、正気を感じられませんでした。いつの間にか目の焦点は外れていて、どこか遠くを見ているようでした。

「すまない。こんな身勝手なこと君を作ってしまった」

彼はそう言って、私に小さく、蚊の鳴き声のような、小さな音を耳元に掛けました。私がこの場所で具体的に何をすべきかを教えてくれたのですが、内容については後々、明らかになるでしょう。

そして、そのまま彼は、フウ、とあくびのような、小さな息を吐いたかと思うと、パタリ、と倒れてしまいました。

老人は、死にました。

自ら生み出した創作物の中で、自ら生み出したキャラクターに看取られ、私を産んだ神は今、魂を、血と一緒に吐き出したのです。力無く横たわる遺体を見つめる私の目は、生気を失った、哀れんだ形をしていたことでしょう。

今思えば、謎の部屋に閉じ込められ、変人に私は殺人者だと自己紹介され、お前は現実の人間ではないと言われ、挙げ句の果てに、身勝手な理由でお前を作った、すまないと言われたのです。普通、なにが起こったのか理解できないかもしれない。理解することを諦める。普通は。

死体の色が、サーツと血の気を無くし、徐々に青ざめていきます。ですが身体は、まだ生きていたのではないかと、と思うほど、ピクピクと動くのです。

不思議な感じでした。私は、なぜか彼に対する恨みを覚えなかったのです。今そこに転がっている死体を見ても、怒りだとか、悲しみだとか、人間の持つ感情を出すことができませんでした。先程まで動いていた、ヒトの形をした生物を、ただただ、呆然と見つめていたのです。もし、鏡を見たならば、私の目は、死ぬ直前の老人の目と同じような、仄暗い、空虚を取りこんだ色をしていたことでしょう。

私の話すことができる拙い話もここまででございます。

これが、私がこんな場所で一人寂しく座っている理由なのです。

ええ、あなた様が今、その手に取っている本、その紙に挟まれた黒文字の羅列の中に、私は生きています。なんとも不思議な話でしたでしょう。

お暇つぶしになれたでしょうか？

……私ですか？ 私は今もこうして、小説の中で、物語上の登場人物として、四角い箱の中で、籠の中の見窄らしい動物のように暮らしているのです。ですから、あなた様が私を、この物語をお読みになるのが待ち遠しくて待ち遠しくて……。

そういえば、老人が死んでから、真っ白な部屋の一部が少々、黄土色に変色しはじめました。ププス、と時折音を立てながら、彼の体は溶けて、胃の内容物を全て戻してしまいそうな、気持ち悪い臭いを部屋全体に撒き散らしています。ただ、全部白の景色に飽き飽きしていたところだったので、そこそこ気分が良くなりました。臭いさえなんとかなれば、いいのですけれど。

さて、私の語れるページも残り少なくなっていました。もうそろそろ、この辺であなた様とお別れして、私も仕事に戻ろうと思います。

……ああ、確かに忘れていました。彼が私に託した仕事。それは一体なんなのか。故人は、浄土で良い香りを食す。これを香食と呼ぶのです。

死んでいった彼らに自分の腐臭を味合わせたくない、と彼は言っていました。

……いえ、そんなに難しい仕事ではありません。むしろ簡単な方ですよ。

『線香を絶やさず焚き続け、良い香りを食べてもらう』

たったこれだけの事ですから。

土木 団（つちき だん）琉球大学大学院 理工学研究科博士前期課程二年



# 詩 部 門

詩部門受賞作

うたたね

二藤

小さなころ

運動場で星砂を探すのが好きだった  
友達と見つけた洞穴を

秘密基地にしておやつを食べていた  
月に一回

病院で注射を打っていた  
みんなそうなのだと思っていた

体の中で骨が軋む音

息をするだけで早まる鼓動  
火照る皮膚

浮腫んで履けなくなった

お母さんに買ってもらったラムネ色の靴

お気に入りだったな

「大きくなるのが早いね」

大人に憧れていたあのころ

みんなと少しチガウ

小さなころ

心の中で思っていた

自分だけ周りとチガウことが誇らしくて

成長と反比例する視る力

眼鏡なしでは階段も降りれなくなった

探していた星砂はお土産コーナーで瓶詰め三百円で売られていて

洞穴は「入るな危険」の看板が立てられていて

副作用だけ残った体はまともに生きれなくて

みんなからずれた私は普通になりたくてしょうがない

隣の芝生は青い

じゃあ私の芝生は何色

赤の芝生も同じ意味らしい

なんか面倒くさいな

芝生なんて全部刈り取っちゃえ

みんな一緒になっちゃえば羨ましいことなんてないよね

小さきものは美しい

雲のないよく晴れた日が似合う

青い空に翼を羽ばたかせる鳥

体を丸めて眠る犬

空き地にひっそりと咲く野花

針穴に糸を通すような

すぐに崩れてしまう弱さを抱えているから

大きくなってしまう自分が

汚れて見えるから

貝殻を当てると波の音がして

いつでもあの日に帰れる  
体の中の波が  
反響して打ち寄せる  
目を開けるとそこは  
いつもの部屋

そろそろ晩ご飯の時間だ

二藤（にふじ） 沖縄国際大学 総合文化学部 日本文化学科 四年

詩部門佳作

# 遺伝する生と

藍原 知音

この乳房や

母性への生贄を示す臓器が

私の体に埋められている

輝くような生を

この胎に抱く可能性を

毎月に訪れる経血の鼓動によって

否応なく知らされる

夜の街灯が照らす

乙女の曲線を捨てた影が

理想となって踊っている

空を飛ぶ鳥や

光に惹かれる虫が

その羽を嫌そうに散らせば

私は楽になれるのに

みんな忙しなく羽ばたいて

生を見せつけてくる

やめてくれ

地上からでも

文明の恩恵を知る私の手は

君たちに届いてしまう

私の思いがけない嫉妬は

言葉を知らぬ君たちへと

非道を知りながら向けられようとしている

生が美しいものだとは知っている

輝いて見えるほどに

恋しく思うほどに  
けれども

染色体を繋げるためだけの  
高尚で神話的な本能が  
まだ残っているだろうか

掘り起こされた私の骸は  
乳房や子宮が融けようと  
骨の描く裸体が曲線を描く  
母性の棲み処など  
掘り起こされた日までに  
粉々に朽ちてしまえ

墓荒らしや考古学者の生誕が  
母性に支えられる世でなければ  
私は人類史で最も報われた女になる  
父性がないねと陰で父を語った母へ  
卑怯な仕返しができる

あなたの娘は母性の寄生を許しはしない

文明人の工夫を凝らして

魔女裁判や動物裁判を繰り返した

人類の幻覚や迷走の儀式

果ての見えない野蛮な日々が

今日も遺伝しながら続いている

藍原 知音（あいはら かずね）琉球大学 人文社会学部琉球アジア文化学科二年

詩部門佳作

肚の蟲

富井嫉妬

幼い記憶

ファストフード店でハッシュドポテトを食べた後

叔母の車の後部座席に座る

何処かへ向かう道の凹凸に身を揺られ

何時の間にか湧き上がる気配に逆らえず

嘔吐した

フロアマットに広がる黄土色の流動体、鼻を突く異臭

慌てる叔母の声、青い顔で俯く私

稚ない罪悪感に、巢食う蟲

やがて私は

嘔気を飲み込む術を覚えた

胃の底にあるべき内容物が逆流し、酸味が喉元を刺すと

私は許し請うように頭を垂れ、それを体内へ押し戻す

苦痛で味付けされ、恐怖を帯びた刺激物は

蟲を肥やす餌になる

私が与える餌を喰らい、蟲は生き永らえる

母親を突き飛ばした晩

生贄にした後輩

裏返した答案用紙

有らぬ菌を伝染させた指先

布団に埋めた着信音

ポリバケツに捨てた牛丼

殺人予告を綴ったノート

大丈夫だよと言いつけた嘘

蟲が胃中を巡り、肚が不気味に波打つ  
無数の脚が、無造作に内蔵を掻き回す  
ワタシを出せるものなら出してみろ  
嘲るように、肚の中から喉元を突く  
私はただ俯いて、蟲が去るのを待つ

私は耐え続け、蟲は成長し続ける

恐ろしくて堪らない

もう幾つ罪を重ねたら

蟲は私の前に現れるだろうか

恐ろしくて堪らない

毒々しい体色、醜く肥えた身体、鈍い鉤爪のような脚々、  
禍々しく変形した口器  
蟲はどんなにグロテスクな姿をしているだろうか

そうやってまた一つ餌を与えた

肚の奥で、蟲が静かにほくそ笑む

富井嫉妬（とみーしつと） 沖縄国際大学 総合文化学部人間福祉学科三年



# 選 評

選評は応募原稿原文に基づきます

## 選評【小説部門】

### 〔びぶりお文学賞選評〕

琉球大学国際地域創造学部 西森 和広

小説部門の応募作九篇について感想を記します。

『香食（こうじき）』は、小説の作品中の人物が実在化して語る物語という設定になっています。語り手は何故か仏壇の中に閉じ込められています。表題はお香を食べて生きていくといったことを表しているようです。作中人物が肉化するという点は特に目新しいわけではありませんが、不自然と思われる箇所も多々ありますが、表題などはなかなかの発明ですし、総じてしっかり書かれています。気になる点を幾つか挙げますと、例えば、小説内小説の作者自身が現れて主人公に自作の原稿を見せるくだりでページに随分長い空白を設けていますが、特に意味があるとは思えません。引用箇所は、どこからどこまでか明確にした方が良いのは確かですが（例えば括弧で括るなど）、これはやり過ぎでしょう。他に気になったのが、会話を鉤括弧で括って直接話法で記した後に「〜と言った。」というような地の文が続く場合、それを記すのに一々行（段落）を変えて書いていることです。以前からこういう書き方をする人が多いのが気になっていました。学生の皆さんは、論文で（長い）引用をする場合は、地の文と引用箇所を明確に分けて書くように学んだと思いますが、これは小説で、また引用ではなくあくまで会話を直接話法

で示すための手段で、全く別ものです。

『人生シミュレーション』は、星新一を思わせるようなSF作品。人生の岐路に立った主人公に示された二つの未来のシミュレーション、そのどちらを選ぶかというお話です。二つの選択肢に、誰が考えてもこつちが良いだろうと思うような違いは少なく、少々単純な結末なのが残念です。大変気になった点の一つ。主人公の両親はどうやって出会い、結婚したのでしょうか。経歴を見る限り、二人には同年齢という点以外には全く共通する点が無いのです。だいたい同年齢同士の夫婦の場合、二人の接点が学校時代にあった可能性が高いと短絡するのですが、父はずっと私立の（おそらく）名門校を歩んできたエリートである一方、母は中卒の専業主婦で、二人の接点はいったどこにあったのかと気になりました。もちろん人生は色々、むしろこの二人の出会いの物語を読みたいと思っただけです。

『罪滅ぼし』は、二人の男性の間に交わされた手紙を軸にした書簡体小説。今年のトピックの一つと言える同性愛（少年愛）による犯罪が扱われています。刑務所と拘留所を混同している他、不自然な表現が散見され、また人間心理の洞察にもう少し深みが欲しい、などの注文はありますが、全体にかなり良く書けています。物語の最初に以下が書簡であるという説明もなく、いきなり手紙の本文から始まる一方、手紙が終わるといきなり作者（あるいは編者と言うべきか）による説明描写がナレーションのように入ります。手紙の部分と説明描写の間に明確な区分けがなく、この作者の介入はかなり唐突な印象を与えます。古典的かもしれませんが、例えば最初に「以下はある二人の人物の間に交わされた書簡である」といった導入があるだけです。

きりとしす。他に手紙の日付や書かれた場所を付記するなど、常套手段ですが、決して陳腐で古臭いとは思いません。そもそも今の時代に手紙でやり取りをするという事自体が大変稀で、その上で何故手紙でなければならなかったのかを最後に解らせる（人物が服役しているため）、それが本作のみそではないでしょうか。そういう点から言っても、作者による説明や介入無しで、すべて書簡のみで構成するということを考えても良かったとは思いますが。すべてを説明するのではなく、暗示する、推測させる、それが出来れば、と思います。

『これは小説である』は、一人の若者が父の死をきっかけに死と生の意味を見出すべく、創作（小説を書く）に踏み出す物語が、主人公の一人称で語られます。主題はおなじみのものですが、多くの創作家にとって必要な第一段階なのでしょう。誤字なども時に見られますが全体に立派に書かれています。主人公の父親もまた創作家（画家）であり、その存在が彼に道を開いたのは確かでしょう。内容面で幾つか疑問があります。主人公は父のことを「驚くほど無口」と評し、「記憶にある限り父の声を聞いたことがない」とまで言っています。「無口」というのは言葉数の少ない人のことで、これでは口が利けないのでは、と思っていると、息子の二十歳の誕生日を前にしていきなり言葉を発します。事実なら主人公の驚きたるや途方もないものだったはずですが、案外あっさり受け入れてしまうのがむしろ驚きです。しかし、父子二人きりで生活を営んできたのに、一体どうやってコミュニケーションを取って来たのでしょうか。いかに親子でも何もかも心伝心だけでは実際の「生活」はとてもできないと思いますし、画家である父が画商や顧客と連絡を取ることであったはずですが。また母について全く触れられていないのも不審です。

父が「無言」でも母親がいるのであればまだ理解もできますが、何の言及もありません。例えば、主人公が物心の付く前にいなくなっただとしても、母について全く言及が無いというのは実に不可解です。性（同性愛）にまつわる意識（無意識？）への言及もあり、そこに何らかのヒントがあるのかもしれませんが、いずれにせよ、全く触れられないというのが気になります。それも一つ。父は、主人公によると、自殺したとのことですが、文面を追う限り、失踪したことが確かだけで、どうやって死んだのかも分かっていないようです。警察から連絡があったといった情報も無く、一体どういう根拠で主人公は父が自殺したと断言できたのでしょうか。しかも、父の死を伝える主人公の態度はあまりに冷静で、『異邦人』（アルベール・カミュ）の主人公ムルソーならともかく、生と死の意味を探索しようというこの主人公にはあまり相応しくない気がします。もちろんそこまですでに成熟し達観していると言われればそれまでもかもしれませんが、私のような、いまだ悟りの境地には程遠い人間には理解し難いことです。

『愛猫家』は、どうにも人生に疲れ果てたような塾講師の主人公の物語。そして彼の唯一の生きがい、あるいは救いと言えるのが、桃太郎という名の飼い猫です。若者の抱える生きる意味の見えない苦悩を描いているという点で共感できます。全体に間違えすれすれと言えそうな独特の言い回しが多く（主人公自身の癖という言い訳も可能ですが）、明らかな誤りも散見します。全体としては頑張って書かれていますので、愛猫という唯一の逃げ場を越える物語がこの先に見えて来れば、と思います。

『逢魔が時』は、大学を舞台に展開する戦時の物語のようです。と言うのも、実は正直よく分

からないのです。物語の時間の流れは過去と現在を自由に行き交っているようですし、登場人物の言葉使いに理解し辛いところも散見され、全体像を正確に捉えるのに困難を感じました。また登場人物の言葉（あるいは考えや思い）を丸括弧で括る場合、鉤括弧で括る場合、そして括弧も句読点すらも無く詩のように短い行が連ねられる場合など、その意図や効果が疑問な点もあります。小説の最後は「自分の皮膚に針を刺す。」の句で締め括られますので、ひよっとするとこの物語は、その表題とも併せて考えてみると、麻薬などがもたらした幻視の世界なのかもしれない、などとも思われましたがどうでしょうか。

『「あい」の牢獄』は、自動車事故で記憶を失っていた主人公の回復の物語であり、真相の解明の物語で、その意味でソポクレスの『オイディプス王』の物語を思わせ、記憶喪失という少々常套的で都合の良い状況設定ではありますが、興味深い作品と言えます。最初に事故前の様子が意識のある主人公の視点で語られ、その後事故と記憶喪失の状態の描写へと経過するという構成で書かれています。これはやはり、病院のベッドで主人公が意識を取り戻した時点から書き起こし、徐々に過去の記憶を取り戻してゆくという展開の方がより効果的で、記憶時間の論理性という点からも納得がゆくものでしょう。内容面では、まず自身も記憶を失う程の衝撃を受けた自動車事故の只中でとっさに殺人などを犯せるものだろうか、という疑問が浮かびます。そういう心理面の疑問は置いたとしても、殺害に使われた凶器が自動車の窓ガラスの破片という点はいかがなものでしょう。この頃の自動車の窓ガラスというのは、安全のために特殊な加工がなされていて、凶器の刃物になり得るような割れ方はまずしなくはないと思うのですが。またよし

んばそういう破片があったとしても、事故による負傷か故意の殺傷かの区別もつかないような、それほど巧妙な殺害法が可能だったとは到底信じられないのですが。文章面で気になった点は、やはり段落付けの不注意や、人物の思ったことや言ったことを括弧で括るか括らないかという点で統一性が無いように見えるところなどでしょうか。

『世界一幸せな男』は、まさに表題通り、幸せな恋の只中にいる青年によるのろけ話のような物語。他愛もないと言えばそれまでですが、随所に交わされる恋人たちの問答が時に哲学的になるのが興味深いところです。全般に、暗い、滅入るような時代を反映するかのような作品が多いのに対し、これはこれで楽しく読めました。ただ「小説」という段階までにはもう一歩が必要でしょうか。

『グイーン・オブ・バビロン』は、未来を舞台にしたSF作品。仮想世界の戦闘ゲームに生きる人物たちに現実の戦闘が混入して来る様が描かれ、そういう意味ではSF作品の定番のプロットと言えます。非常に手慣れた文章で感心しますが、小説というよりも映画やアニメの台本のよきな趣きで、内容の面でも私のような者には全くピンと来ないのが申し訳ないところです。しかもかく達者な文章であることは確かで、その点では今回の応募作品中で一番かもしれませ

ん。  
最後に全体に気になった点を挙げておきます。個別の作品評でも適宜書きましたが、会話文を直接話法で挿入した後に、「〜と言った。」などの地の文が続く場合、括弧を閉じた後にそのまま続けられよいのに、わざわざ行を変えて「と言った。」だけに一行を費やすような書き方を

している例が実に多く見られます。文章の流れからも、見た眼からも美しくはないと思います。直接話法の文はすべて独立させて書かなければいけないと考えているのかもしれませんが、戯曲や映画台本のト書きではありませんから、地の文と会話文を逐一分ける必要はありません。あくまでも文章の流れ次第でしょう。名作と呼ばれるような作品に親しんでいれば自ずと分かることだと思っただけです。以上です。

(にしもり かずひろ／国際地域創造学部教授)

## 第十七回びぶりお文学賞選評

村上 陽子

今年度、小説部門には九作品の応募があった。表面上は整っているものの、設定に無理がある作品、物足りなさが感じられる作品が目立ち、残念ながら正賞は該当作なしという結果となった。

佳作を射止めた二作は、いずれも作者のペンネームが作品の一部となっている。今回に限ってみれば大変面白い工夫である。しかし、今後書き続けるときに作者たちはこのペンネームを使い続けることができるだろうか。ぜひ長い目で見てペンネームを考えてみてほしい。

佳作一作目、「これは小説である」は、画家の父親を強く意識しながら、父と関わることなく人生を過ごしてきた十九歳の「ぼく」を主人公としている。父の才能に負けて自分の表現を掴み取れなかった「ぼく」が、小説という表現方法を手にするまでの物語である。みずみずしい文体と独自の表現に魅力がある。また、芸術家である父の言葉や作品への思い、「ぼく」が自ら考えたペンネームに託した思いなどは巧みに描けていると言える。しかし、「ぼく」の想念と実際に作中で起こっている出来事の区別がややわかりにくい。また、父や母といった家族とのあり方については、いまま少し書き込みがほしい。父と同じ家に長年住みながらも「父の声を一度も聞いたことがない」という設定にもかかわらず、父からの酒の誘いをきっかけに流れるように会話が始まるという展開にもやや無理があるのではないだろうか。「ぼく」と父の葛藤を主軸に、余計な

設定を刈り込んだり、逆に不足している情報を補ったりという一手間があれば正賞に値する作品になったのではないかと思われる。

佳作二作目の「香食」では、老衰の末に死を迎えようとしている作家が、自らの作品世界において死を迎えた登場人物たちを弔うための存在を創出する。創出された「私」は、物語が進むにつれて自らの存在意義を掴み取り、作家の望みに従って弔いを行うこととなる。こうした作品全体を支える発想は評価したい。しかし、「私」を取り巻く語りの構成が迂遠でわかりにくく、登場人物の中でただ一人自我を持つ「私」という存在についても十分に説明されていないという印象を受ける。文章表現が巧みであるだけに、より精緻に書かれていればと惜しまれる作品であった。

ほかに選者から一定の評価を与えられた作品に、「人生シミュレーション」と「クイーン・オブ・バビロン」があった。前者は、すっきりとよく書けていたものの、二種類のシミュレーション結果の正解／不正解が明確すぎた。このようなシミュレーションでは、正解以外の結論は選びようがないだろう。しかし、人生は、どのような道を選んだとしても正解／不正解が定かではない要素を孕むものではないだろうか。また、後者は登場人物のキャラ設定が明確で、スピード感のある展開に好感が持てた。何よりも、作者自身が楽しんでバビロンという世界を構築したのだと感じられた。しかし小説というよりはシナリオ的であり、世界の構造や問題点を読者に伝える工夫が不足していた。仮想世界バビロンで戦闘を経験した登場人物が痛み止めを必要とする場面があるが、そのような感覚がプレイヤーにどう知覚されるのかなどに関しては、より細かい

設定が必要であろう。

このほか、いま一步という地点に留まってしまった作品にもふれていきたい。「罪滅ぼし」は、書簡を利用した小説で、小学生男児に性欲を感じる「川口」と、その友人の物語である。細部の表現には光るものがあった。しかし、吃音やいじめ、性加害などの重い問題が錯綜する展開にもかかわらず、どれも深くは掘り下げられないまま、「川口」の死によってそれらが解決しないままに閉じていくという印象を受けた。一つひとつのテーマをより繊細に扱ってもらいたい。

「あい」の牢獄」は、力を込めて書かれている。しかし、この作品でも毒親に囚われて加害に転じてしまうという当事者の問題が比較的安易な結末に結び付けられている。特に精神科医による対応や、殺人が露見しない展開には疑問が残った。

「世界一幸せな男」は、嫌味のない、やわらかな会話によって綴られるほのぼのとした印象の作品である。「來縁」という登場人物の名前に關しては、説明か、最低でもルビがほしいところである。おいしいものを食べながら好きな人と語り合うという時間はほほえましいものだが、それ以上の強さがなかった。また、全体的にジブリ作品への言及や雑学の影響などが多く、オリジナリティという面では評価がしにくい。

「愛猫家」は、猫という存在に身を捧げる、不器用な主人公の話である。主人公の生きにくさや殺伐とした環境は身につまされる。猫のために労働し、猫に癒やされている自分を主人公は「哀れな奴隷」だと自嘲する。その通りかもしれないが、愛猫家であるならば、猫そのものにもう少筆を割いてほしかった。猫自身もまた、人間の支配者ではなく、生をつなぐために行動するあ

たたかい生命体なのだから。

「逢魔が時」は、登場人物のキャラ設定が明確ではない。こうした設定で物語を駆動していくのであれば、一人ひとりのキャラクターに明確な個性や動機がほしい。そうでなければ、いたずらに登場人物の数が多い、読みにくい作品になってしまう。

小説を書くのは簡単ではなく、書きたいものを書き切る筆力が必須である。テーマを見つけたら、そのテーマをとことん掘り下げて行ってほしい。そして、自らの言葉が見知らぬ読者に届くものになりえているかどうか、幾たびも検証してほしい。そうした時間こそが小説の書き手を育ててくれるに違いない。

(むらかみ ようこ／沖繩国際大学総合文化学部教授)

## 第十七回琉球大学びぶりお文学賞（小説部門）の選考をおえて

高瀬 裕人

本年度も「琉球大学びぶりお文学賞」（小説部門）の選考に加えていただき、選考を行った。本年度、小説部門には、九作品の応募があった。応募作品を、一読者として読み、選考委員の先生方との協議を経て、本年度の「琉球大学びぶりお文学賞」の正賞は「該当作品なし」という結論に至った。佳作として、野口佳氏の「これは小説である」と、土木団氏の「香食」の二作品を選出した。本年度は、全体的に見て厳しい審査になったように思われる。ただし、それだけ選考委員がこの「琉球大学びぶりお文学賞」に対して期待していることを示しているとも言えるだろう。以下では、本年度の受賞作品も含め、選考にあたって感じたことを記しておきたい。

まず、佳作に選出した一つ目の作品「これは小説である」についてである。世界をまたにかけて活躍する父とぼくとの関係性を描いた作品であった。安定した筆力を感じさせる作品であったように感じた。ただ、設定を見ると、あまりにも無理があるのではないかと感じたのが率直な感想である。たとえば、僕が「記憶にある限りでは」と断りを入れつつも、父の声を聞いたことがないという部分。一緒に暮らしているにも関わらず、である。そしてそんな父と僕が、僕の二十歳の誕生日をきっかけとして、お酒の力も借りつつ、語り合っていく。さらには、目が覚めていなくなった父は自殺だったと語られる。しかし、その証は少なくとも読んだ限り語られないままである。こうした展開の部分でもう少し工夫されていけば、もっと読みごたえのある作品に

なるだろうし、多くの人を惹きつける作品になっていくのではないだろうか。この作者の力量からすれば、それは無理な要求ではないように思う。

次に、佳作に選出された二つ目の作品「香食」についてである。この作品は、「私」が密室に閉じ込められたという設定で物語が始まる。その「私」の背後から突如現れたもう一人の登場人物が現れる。そのしがない小説家が、自分のこれまでの罪への懺悔のために書き記したノートに纏わる話を聞くという形で展開される作品である。おもしろく読み進めることができた作品である。ただ、物語のなかを生きる「私」が、つまり小説家によって創りだされた存在の「私」が、行為や意識の主体として存在しはじめるのが曖昧なままにされているように思われてしまったのは、残念であった。さらに言えば、小説家である「土木団」の死因のみが「老衰」ということや、その小説家の死後から結末にかけても、なんだかいま一つ物足りなさを感じられずにはいられなかった。これらの点が克服されていくと、さらに読み応えのある作品になっていくことと思われる。

さて、以下では、今回の選考では残念ながら、受賞にいたらなかった七作品についても読んで感じたことを記しておきたい。

「人生シミュレーション」についてである。まとまった作品であったと感じた。題名が示すように、二つの「人生」が示されたうえで、主人公がどちらを選ぶかという作品である。ただし、この二つの選択肢がはたして天秤にかけられるものだろうかと感じてしまった。この点を解消することができれば、もっとダイナミックな作品になったのではないだろうか。「罪滅ぼし」につ

いてである。性加害の問題を取り上げた作品であった。これらの問題を扱うことの難しさを示してくれた作品だったように思う。そのうえで、「罪」の重さとどう向き合うかという点からやはり物足りなさを感じた。取材を含めて、もっと書き込まれるとよいのではないだろうか。「愛猫家」について。20代半ばの塾講師を務める若者を主人公とした物語だった。その主人公が飼った猫を頼りに生きていく展開であった。全体的には主人公の一人語りで展開されるが、大きな山もなく、読んでいて物足りなさを感じずにはいられなかった。どうすれば、一人語りを活かす作品になるのか、再考が求められよう。「逢魔が時」についてである。戦争を題材とし、大学を避難場所とし、そこでの生活と、それまでの生活を描いた作品であった。ただ、結末まで読んでいても、すっきりしないというか、全体的な展開がゆるやかすぎるのではないかと感じてしまう作品であった。作品の構成を精査し、細部が際立つように書き込んでいかれると良いのではないだろうか。「『あい』の牢獄」についてである。母と娘の関係性を問題にした作品であった。短編とは言え、結末が予測しやすい展開であったと感じた。題名にもある「あい」という表記は、細かいところだが本文中も含めて、もう少しこだわってほしいところである。冒頭部分においてどこまで見せるのかを含めて、作品の構成を練り直すことで、読み応えのある作品に仕上がるのではなからうか。「世界一幸せな男」についてである。主人公の「僕」と一人の女性との会話を中心として展開される物語であった。何気ない日常の二人の会話を中心とすることで、「幸せ」とは何かを描こうとしたのだろう。だからこそ、少し単調さを感じられずにはいられなかった。読み手が感じる単調さをどう乗り越えうるのかという点から、もう一度練り直してみしてほしい。「クイーン・

オブ・バビロン」についてである。かなりの分量をかけて描かれた作品であった。設定は現代から近未来的なものでありつつ、王国ものの映画の脚本のような作品だったというのが率直な読後感になるうか。まともりのある作品であったという印象を受けた。それゆえに小説というジャンルでなければ、高い評価をすることもできただろうか。このあたりが悩ましいところであった。

以上は、今回残念ながら落選してしまった作品を読んで感じたことである。今回「びぶりお文学賞」小説部門の選考に携わり、応募された作品を読んでみて、基本的な文学創作の力を感じるものが多いものの、やはり読みごたえがある作品、人を惹きつける作品をうみだすことの難しいことなのだということもあらためて感じた。この点に関して、より苦心された作品が今後応募されてくることを願っている。その意味でも、今回の落選であきらめることなく、自らの文学創作の力に磨きをかけ、機会を活かして粘り強く応募し続けてほしい。

最後に、本年度も、琉球大学びぶりお文学賞の公募から選考に至るまで、諸々とこまやかな心配りをしていたいただいた附属図書館のスタッフの方々のおかげで、今年もこうしたすばらしい文学賞の選考に携わることができたことに対して、心より御礼を申し上げます。今後、この琉球大学びぶりお文学賞が、若き作者たちが自分の力を信じ、磨いていく、そのような場であり続けることを願っている。

（たかせ ゆうじん／教育学部准教授）

選評【詩部門】

時の波間に失われるもの

宮城隆尋

気がつけば、引き返すことなど想像もできないような地平に立ち尽くしている。近視眼的な日常を流れる時間（または空間）からふと解放されたとき、失ったものに気づくことがある。日々の情景は移ろいで、わたし／あなたは変わっていく。世界も少しずつ変わっていく。変わらないものはひとつもないようなこの世を生きている。しかし時間と空間のはざまに視線を投げれば、変わらないものがそこに姿を現すようにも思える。

〈洗濯ばさみの劣化した／プラスチックが粉々になる／畳の目にこびりつくそれは／砂浜に埋もれるシーグラスみたい／あ、そういやこの前／僕より大きな発泡スチロールが／砂浜に打ち上がってたな／なんだか大きな魚の死骸みたいに／波打ち際で揺られてたんだよ／それも一つだけじゃなくて／二つ三つ／ぽつぽつと／なんかそいつら見るとさ／死のうにも分解できない／可哀想な生き物に思えてさ／なあ／僕が死んだらちゃんと土に還れるよね〉（二藤「不可燃物」第1〜2連）

〈バス停に／階段に／家の玄関に／図書館のお気に入りの場所に／大きな穴があって／今か今かと見つめている／わたしは今日の夕飯を何にするか考えたりして／穴の上を跨ぐ〉（二藤「琴

線を壊す」第3連)

時間の波間に消えていく細かな日常をすくい取る眼を持つ担い手は、自己を対象化する眼をも持つ。描かれる詩の語り手は、シーグラスのような洗濯ばさみの崩れた粒になり、波打ち際で漂う燃えないゴミになる。日常を切り取ったような何気ないスケッチが人の目を奪うとき、そこに描かれているものとは一体何だろうか。発見したものを共有することで得られる共感などという現象だけでなく、作品の受け取り手がそのとき普遍的な何かに触れているということではないのか。ここまでで挙げた特質に加え、この書き手の美点が最もよく表れた作品が「うたたね」(二藤)だろう。

〈小さなころ／運動場で星砂を探すのが好きだった／友達と見つけた洞穴を／秘密基地にしておやつを食べていた／月に一回／病院で注射を打っていた／みんなそうなのだと思うていた〉  
(二藤「うたたね」第1連)

〈探していた星砂はお土産コーナーで瓶詰め三百円で売られていて／洞穴は「入るな危険」の看板が立てられていて／副作用だけ残った体はまともに生きられなくて／みんなからずれた私は普通になりたくてしょうがない〉(第4連抜粋)

ここでも時の流れとともに失われるものが描かれる。具体的なイメージが提示され、そしてそれが変化することによって、読み手の感情が掻き立てられる。とはいえ病を描く手法じたいは、ありふれたものだ。素材に寄りかかった表現に陥らないためには、描写の先に何を見せられるかどうかだろう。

この詩では異なる時間の結節点が描かれ、日常に着地する。読み手はこの作品の行間からとても大切なことを発見することができるのだと思うが、筆致の素っ気なさに驚く。ここに表れているのが、この作者の自己対象化の力量なのだろうと思う。もし大仰な表現になってしまえば、読み手がその発見を共有することを妨げてしまうはずだ。逃げることを潔く諦めて生きることのあるのままに正対するような、この担い手ならではの腹のくくり方が表れているのだろう。これはわたしたちにとって、大きな希望となりうるものだ。

三作品とも深く引き込まれた。受賞作品集に掲載されるのは「うたたね」だけが、掲載されない「不可燃物」「琴線を壊す」もどこかで発表され、多くの読み手に触れてほしい。

「骨への憧れ」というベクトルを描くことで肉体嫌悪を昇華するのだとしたら、それは当事者のみにとどまらない可能性を秘めた、画期的な営みだとも思う。ジェンダー規範の破壊は社会的抑圧からの解放のみならず、最後に残された（五感という）人類の幻覚に別れを告げ、肉体からの解放をもたらすことにさえつながるのかもしれない。「遺伝する生と」（藍原知音）という詩を読んで、これからさらに擬似的な感覚に均一化、効率化していく（肉体を捨て去る日も近いのかもしれない）であろう人類の行く先には、一条の光を見る思いがした。

そのようにイメージが飛躍する土台には、行間から感じる痛みがある。詩の語り手（作者であるかもしれないが）が血を流して紡いだような詩語の連なりであると思う。肉体を脱ぎ捨てて骨になるといふほどの、痛みを伴う暴露を、この詩は既に実践させているということになる

う。その痛みを引き受けて読むとしたら、一人の人間が生きる時間を越えた、長い時間軸を思わずにはいられない。書かずにおれないものが確実にあるという迫力がある。

大切に思うものを大切に扱う、大切に描くということは、案外むずかしいものだ。対象と正対する必要がある。そうやって紡がれた言葉に人は惹きつけられる。「祈りの器」（富井嫉妬）という詩の言葉ひとつひとつに、優しいまなざしがある。「青い蛇」（同）もそうだ。同じ作者の「肚の蟲」には贖罪のような言葉が連ねてある。悪意や嘘を他者へ向ければ、己も同じように傷つくことになる。その積み重ねが、自己の内部に得体の知れないものを飼ってしまうことにつながる。そのような造形は自己への、自己の生への真摯なまなざしの表れだ。

選外で「触れる」（石川）という佳品もあった。幼い頃に何でも触れることができていたのに、いつの間にか触れられなくなったものがある。それらは恐らく、触れることで明らかになる事実があり、触れてしまえばそれを無視することができなくなるために、触れないという選択をしているのだろう。人が「触れなくなる」ことの原理と、その土台にある誠実さ（または不誠実さ）について考えさせられた。

今回の応募作は十二編。どれも質が高かった。作品数は少なくても、心を激しく揺さぶられる作品にいくつも出合えたことはこの上なく幸運だった。入賞者も惜しくも選に漏れた方も、詩作

を通して自己や社会と向き合い、闘い続けてほしいと切に願う。

(みやぎ たかひろ／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人)

正賞

「うたたね」（二藤）

各連に詩的な表現があり、深くポエジーを喚起させる詩である。

△小さなころ（中略）月に一回／病院で注射を打っていた。子どものころはそれほど気にならなかったことが、作者自身の日常に小さな影を落としている。

△探していた星砂はお土産コーナーで瓶詰め三百円で売られていて／洞穴は「入るな危険」の看板が立てられていて／副作用だけが残った体はまともに生きられなくて／みんなからずれた私は普通になりたくてしようがない。子どものころとは、いろいろなことが変化してしまっただけ、あの頃には気づかなかった、現実の哀しみが自分の内面で脈打っている。△隣の芝生は青い／じゃあ私の芝生は何色。周りの普通のもの、自由なもの、美しいものへの羨望の気持ち、生への渴望が行間から滲み出る。人は皆、誰でも人知れず困難をかかえているものだ。

しかし、△貝殻を当てると波の音がして／いつでもあの日に帰れる／体の中の波が／反響して打ち寄せる／目を開けるとそこは／いつもの部屋。△と、作者は瑞々しい感性と想像力を駆使して、自らを希望の世界へ導く。最終連で、タイトルの「うたたね」に結びつくところは見事だ。

同じ作者の「不可燃物」「琴線を壊す」の二篇の詩も、「生」「命への愛おしさ」がテーマである

う。詩を書くことは、人間の魂の深い部分のみつめるとともに、自らを希望の世界へ導く再生力をも与えてくれると信ずる。是非、書き続けてほしい。

佳作

「遺伝する生と」（藍原知音）

作者は語彙が豊富で詩的言語も豊かである。この詩は、様々な解釈ができると思うが、女性性であることに對して、世間一般の人々が抱く理想像への葛藤が書かれていると思う。

△夜の街灯が照らす／乙女の曲線を捨てた影が／理想となつて踊っている（中略）やめてくれ。結婚して、子を生ずという、ストーリーに對する反発と母親への反抗とが一本の線で繋がっている。

△掘り起こされた私の骸は／乳房や子宮が融けようと／骨の描く裸体が曲線を描く△と、自身の将来に、決意を抱いているように感じられる。「生」が美しく輝かしいものであることを認めつつも現実の世界に對する不信感がぬぐえない。自分らしく自然に生きることはなかなか難しい。

△文明人の工夫を凝らして／魔女裁判や動物裁判を繰り返した／人類の幻覚や迷走の儀式／果ての見えない野蛮な日々が／今日も遺伝しながら続いている△と、弱者や少数派の個の自由や価値観を認めない社会、その憂いの根源に對して、または同調圧力に對して、作者は抗っているのだろう。自分らしく生きることへの真剣な姿勢を感じさせる詩で、力強く胸奥に響いてくる。

同じ作者の「氷塊」も、自らの姿勢の堅持と存在意義を追及する詩だ。△今は氷塊の上で／その冷たさが融け切る春を待ち望んでいる▽。精一杯生きようとする作者の姿が眩しい。是非、書き続けてほしい。

「肚の蟲」（富井嫉妬）

幼いころの体験によって獲得した負の感情によって、作者の内面で「蟲」が成長し続けているという。「蟲」とは何を象徴しているのだろうか。自責の念、怖れる心、あるいは世の中の様々な悪の概念か。このような負の感情を、多くの人が経験し苦しむが、それは誠実さや調和性の裏返しでもあるのではないか。

△やがて私は／嘔気を飲み込む術を覚えた▽。しかし、△苦痛で味付けされ、恐怖を帯びた刺激物は／蟲を肥やす餌になる▽。負のスパイラルである。

六連目と八連目の△蟲が胃中を巡り、肚が不気味に波打つ／無数の脚が、無造作に内臓を掻き回す／ワタシを出せるものなら出して／嘲るように、肚の中から喉元を突く／私はただ俯いて、蟲が去るのを待つ▽、△毒々しい体色、醜く肥えた身体、鈍い鉤爪のような脚々、禍々しく変形した口器／蟲はどんなにグロテスクな姿をしているだろうか▽は、目には見えないはずの蟲でありながら、リアリティーに満ちて、迫力がある。

若いうちは律義に何かを背負うことが多いものである。自己肯定感とともにこのような罪悪感も大切な感情の一つではないだろうか。作者も「蟲」からの自立、自己革新をめざして一生懸命

生きようとしていることが行間に溢れている。

選外ではあるが「触れる」という詩も心に残った。△子どもの頃はなんでも触ることができた／道に落ちているBB弾／近所の野良猫／石をどかしたら出てくるダンゴムシや小さなゴキブリ／今思い出すと汚すぎて、恐ろしくてたまらない／いつから触れなくなったのだろう▽。この一連目が、「触れる」というタイトルのポエジーを喚起する。惜しかったのは、三連目からのタカムラさんとのエピソードが一連目と距離感があること。別のエピソードがあれば良かったかも知れない。

今回は、昨年に比べて応募数が少なく寂しく感じました。それでも、応募してこられた方々は、真摯に詩に向き合い、詩作を通して「生」と格闘していることを実感しました。一篇一篇に感動があります。詩は読み手によって、さまざまな解釈ができるものです。書いた人が意図しない感動や勇気を与えることもあるでしょう。書く人自身も、詩にすることで自らの内面を見つめ、生きる道標を見出すこともあるものです。

詩は書き続けることで、筋力が蓄えられるともいいます。今回、残念ながら選に漏れた方々も含め、多くの若い人たちが詩作に挑戦してほしいと願っています。生きづらさや狂おしさや希望、または幸福感など、自らの内面を真剣にみつめ詩で表現することは、とりもなおさず「生きる」ことに繋がると思うからです。

(ながみね さちこ / 外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人)

第十七回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

【募集期間】令和五年五月十九日～十月二十四日

【応募総数】小説部門 九編 詩部門 十二編

【応募者所属内訳】

小説部門 琉球大学 七編（人文社会学部 二編、国際地域創造学部 一編、

理学部 二編、工学部 一編、理工学研究科 一編）、

沖縄国際大学 二編

詩部門 琉球大学 三編（人文社会学部 二編、国際地域創造学部 一編）、

沖縄国際大学 九編

【応募者学年内訳】

小説部門 一年次 一編、三年次 四編、四年次 三編、大学院 一編

詩部門 二年次 五編、三年次 四編、四年次 三編

【選考会議】

小説部門

開催日 令和五年十一月二十四日（金）

選考委員 西森和広（国際地域創造学部教授）、高瀬裕人（教育学部准教授）、

村上陽子（沖縄国際大学総合文化学部教授）

詩部門

開催日 令和五年十一月二十九日（水）

選考委員 宮城隆尋（山之口獏賞受賞詩人）、長嶺幸子（山之口獏賞受賞詩人）

# 第17回 琉球大学びぶりお文学賞



締切：2023年10月24日(火)17時必着

発表：2023年12月初旬予定

## 【募集要項】

- 1.ジャンルは小説・詩の2部門とし、両部門の重複応募を認める。
- 2.日本語で書かれた未発表作品に限る。  
同人誌・インターネットなどで発表したものは選考の対象外とする。
- 3.応募資格  
・沖縄県内に本部が所在する大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校生（高等専門学校の場合は、本科4年次以上）とする。  
・過去のびぶりお文学賞において受賞作品となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。
- 4.応募に際しての注意事項  
・応募原稿は、応募原稿テンプレートのファイル形式(.docx形式)のまま提出すること。  
・応募原稿は返却しない。  
・個人情報にはびぶりお文学賞に関する連絡以外には使用しない。  
・応募作品は冊子『びぶりお文学賞作品集』およびインターネットにて公開するので、これに同意できる作品に限るものとし、応募した時点で同意したものとみなす。  
・各部門正賞受賞者に、受賞後、受賞コメントの作成を求めると及び当該受賞コメントを、館報『びぶりお』へ掲載及びインターネットにて公開することについて、応募した時点で同意したものとみなす。
- 5.著作権の取り扱い  
入賞作品の出版及び公衆送信にかかる権利は、琉球大学に帰属するものとする。

## 【賞】

小説部門  
受賞作1編 副賞：図書カード10万円分  
佳作数編 副賞：1編につき図書カード5万円分

## 詩部門

受賞作1編 副賞：図書カード5万円分  
佳作数編 副賞：1編につき図書カード1万円分

## 【選考委員】

小説部門  
西森和広（国際地域創造学部教授）  
高瀬裕人（教育学部准教授）  
村上陽子（沖縄国際大学教授）

## 詩部門

宮城隆寿（山之口顕賞受賞詩人）  
長嶺幸子（山之口顕賞受賞詩人）

## 【送付先および問合せ】

〒903-0214  
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地  
琉球大学附属図書館 サービス企画係  
E-mail: [tskikoku@acs.u-ryukyu.ac.jp](mailto:tskikoku@acs.u-ryukyu.ac.jp)

※応募方法・応募原稿テンプレートについては、図書館ウェブサイトを必ずご確認ください。

<https://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>

[info/11806/](mailto:info/11806/)



第十七回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇二四年二月十五日

編集 琉球大学附属図書館

装丁 阪田 清子（沖縄県立芸術大学准教授）

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

沖縄県中頭郡西原町字千原一 番地

印刷 株式会社 近代美術

非売品

転売禁止

## 第17回

### 琉球大学 びぶりお文学賞

#### 小説部門

佳作 **これは小説である**  
野口 佳（琉球大学）

**香食**  
土木 団（琉球大学）

#### 詩部門

受賞作 **うたたね**  
二藤（沖縄国際大学）

佳作 **遺伝する生と**  
藍原 知音（琉球大学）

**肚の蟲**  
富井嫉妬（沖縄国際大学）

## 第17回

### 琉球大学 びぶりお文学賞

#### 小説部門

佳作 **これは小説である**  
野口 佳（琉球大学）

**香食**  
土木 団（琉球大学）

#### 詩部門

受賞作 **うたたね**  
二藤（沖縄国際大学）

佳作 **遺伝する生と**  
藍原 知音（琉球大学）

**肚の蟲**  
富井嫉妬（沖縄国際大学）